



村のえっろい風習のおかげで
母とセクロスできました。

MADE BY MORROW

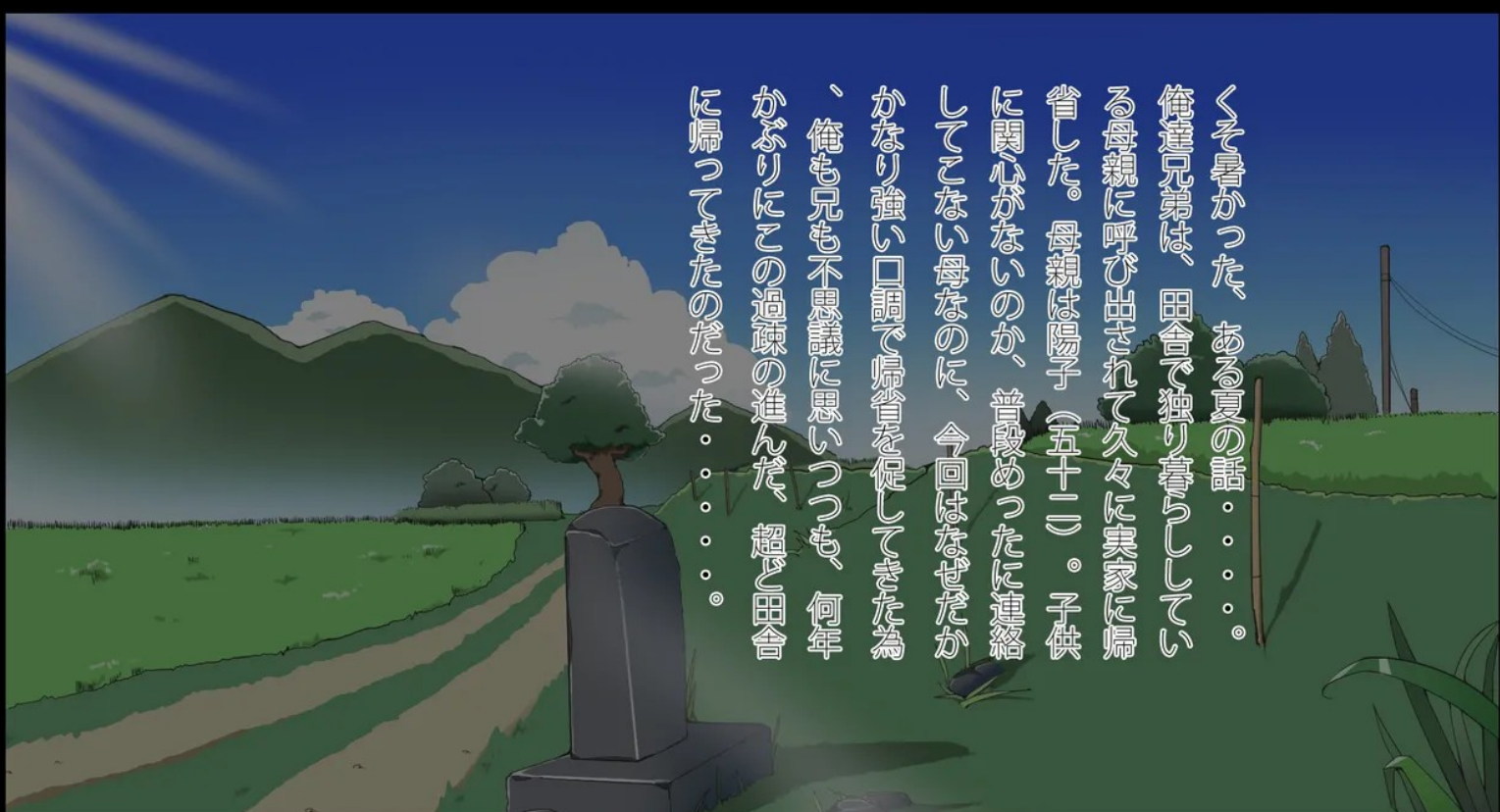


村のえっろい風習のおかげで
母とセクロスできました。

MADE BY MORROW

くそ暑かった、ある夏の話。。。。

俺達兄弟は、田舎で独り暮らししている母親に呼び出されて久々に実家に帰省した。母親は陽子（五十二）。子供に関心がないのか、普段めったに連絡してこない母なのに、今回はなぜだかかなり強い口調で帰省を促してきた為、俺も兄も不思議に思いつつも、何年かぶりにこの過疎の進んだ、超ど田舎に帰ってきたのだった。。。。



見捨てられたかのように大きな国道から切り離された谷あいの小さな村。

娯楽施設なんて一切ないから、当然若者達は俺達兄弟を含めてみんなこの村を出ていく。。。。。

「。。。。ただいまー。」

バス亭からの遠い道のりをひたすら歩きやつと実家にたどり着くと、すでに兄貴は着いていて、暇そうにテレビを眺めていた。

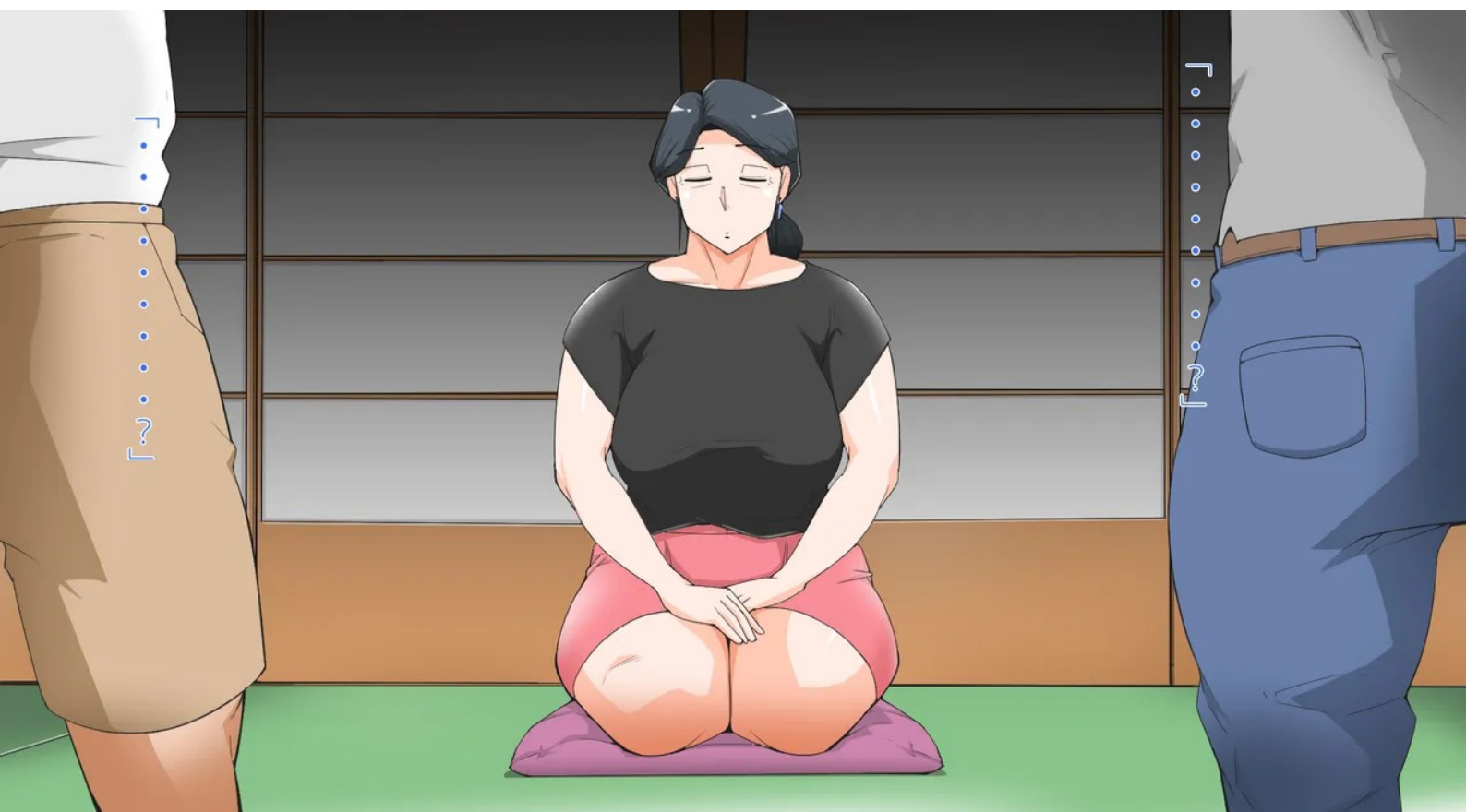
「遅かったねー。荷物置いて、ちやつちやとお昼たべちゃって!。」

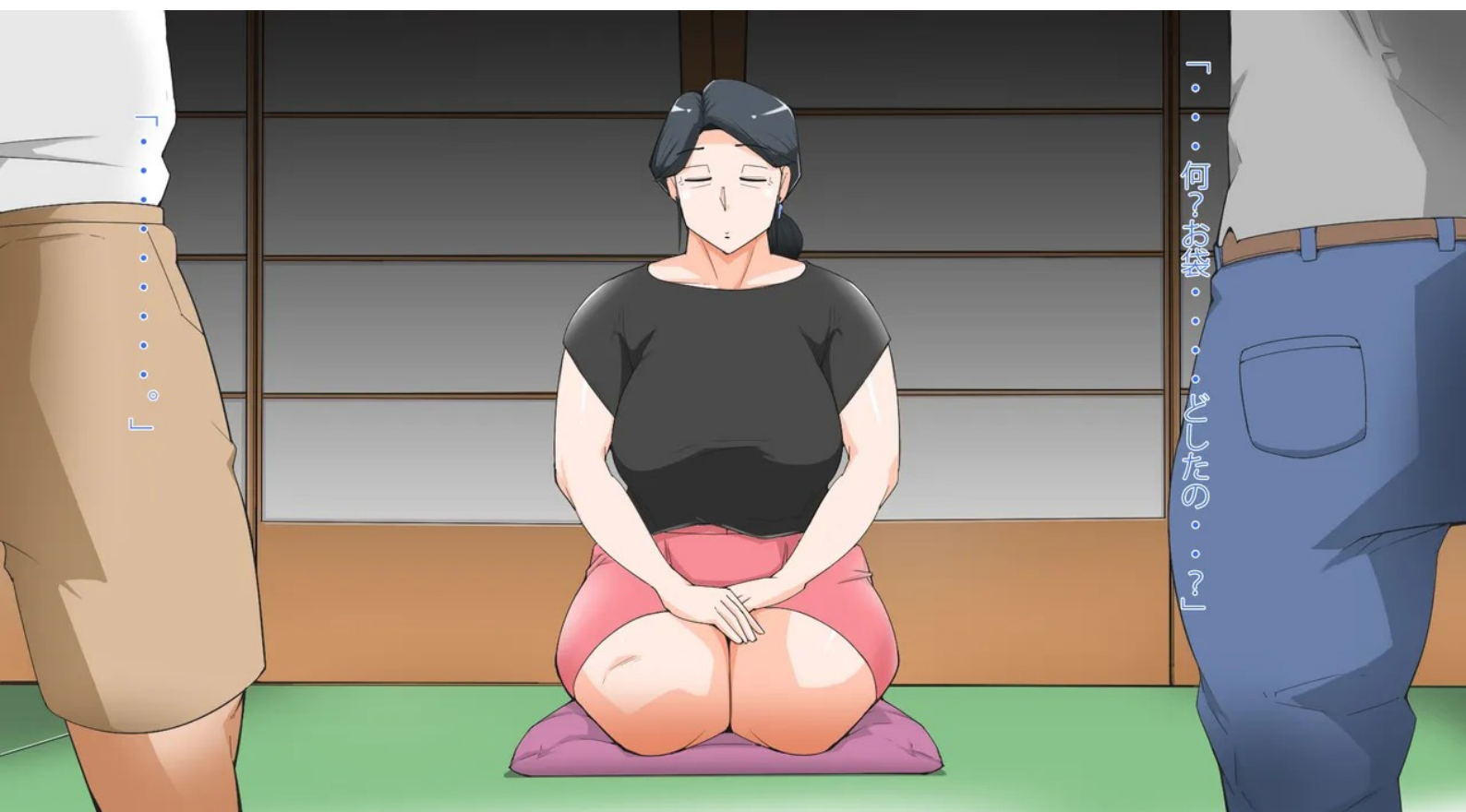
久しぶりの母の手料理をゆっくりと味わう間もなく、急かされるように胃袋に流しこみ終わると、

「。。。。それじゃ二人とも、話があるから。。。。寝室にきなさい。」

話があるのに……。寝室？。

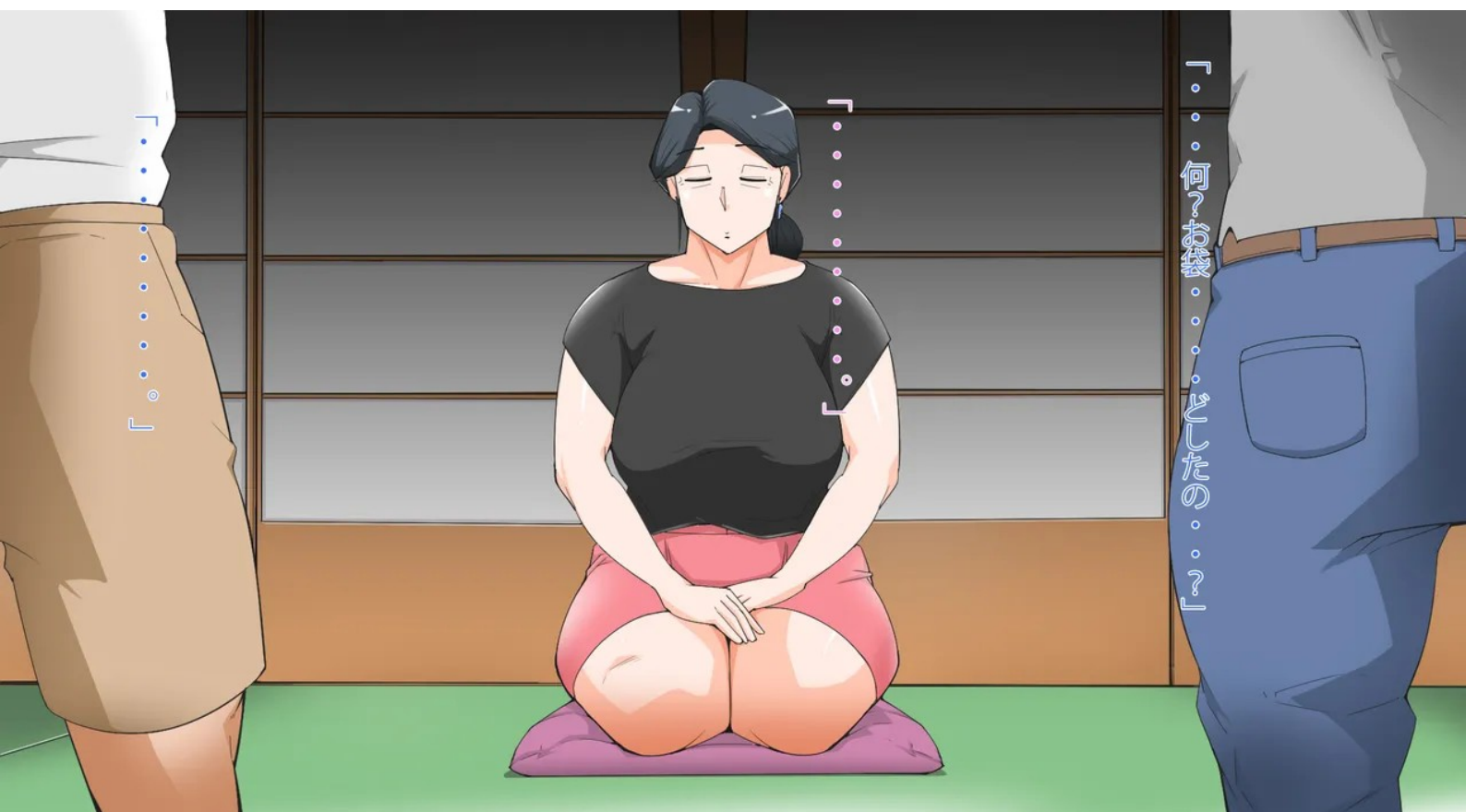
俺と兄貴は顔を見合わせた。妙な違和感を
感じながら母の寝室の戸を開けると、静か
に母は正座をして俺たちを待っていた。





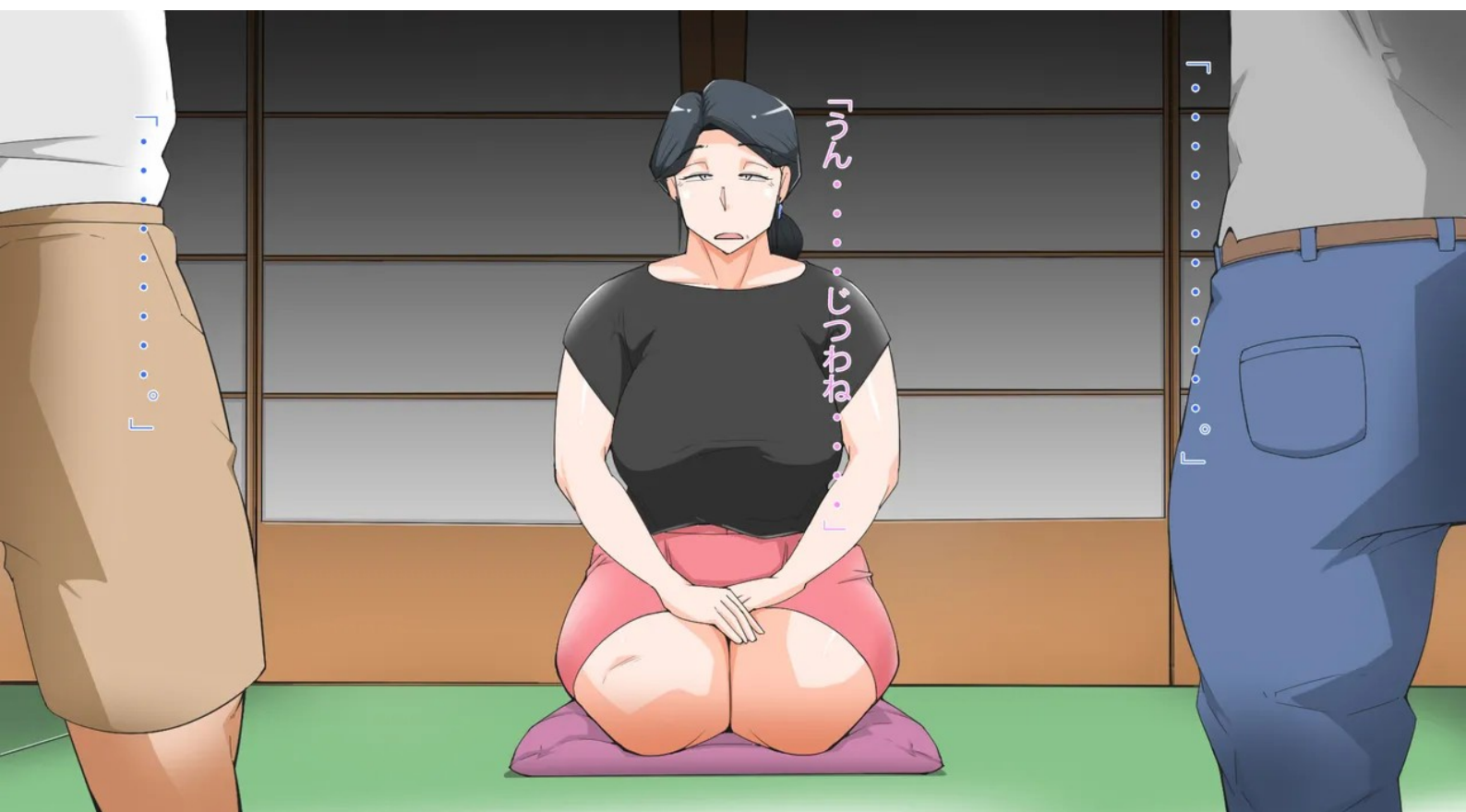
「...何...様...で...の...」

「...」

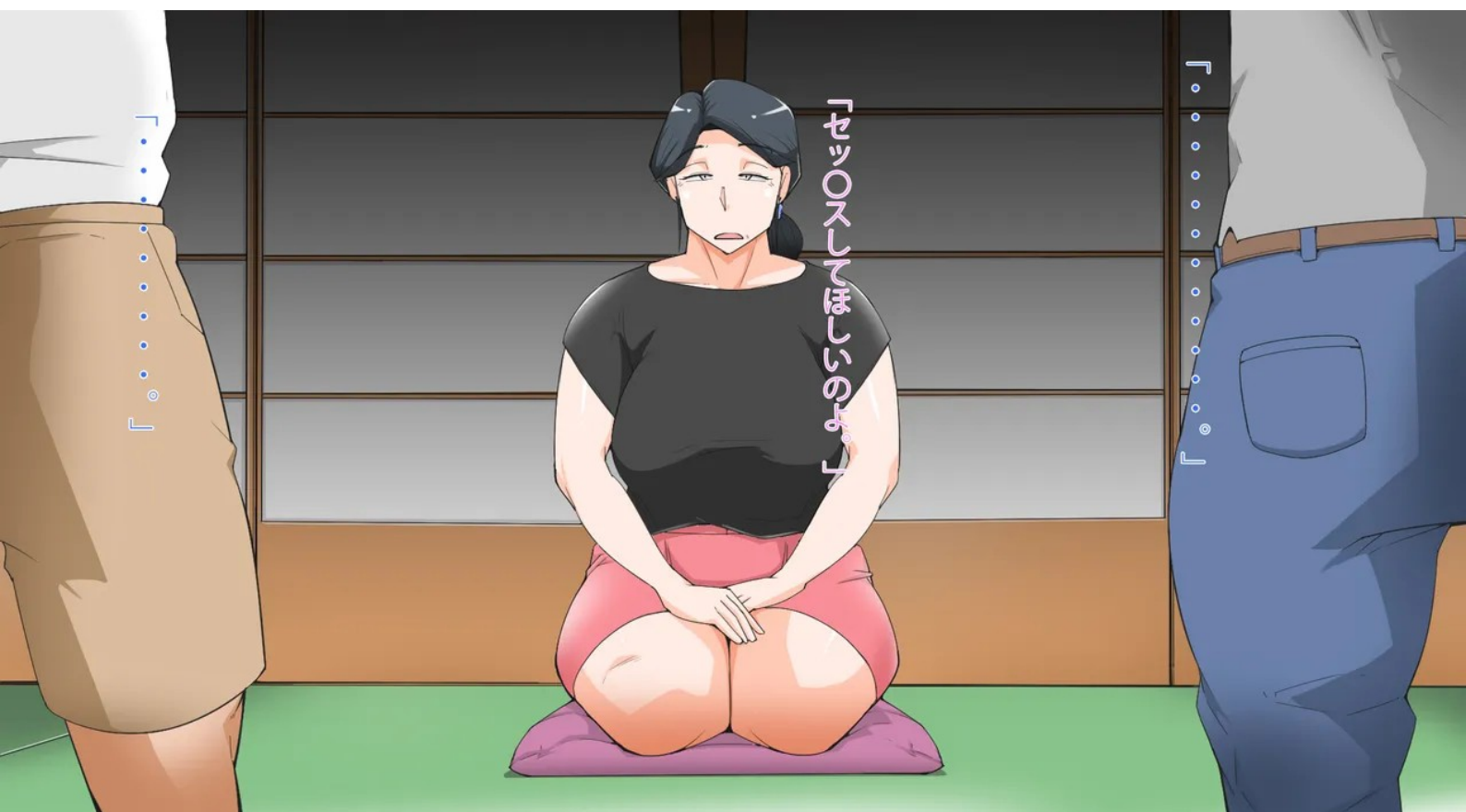


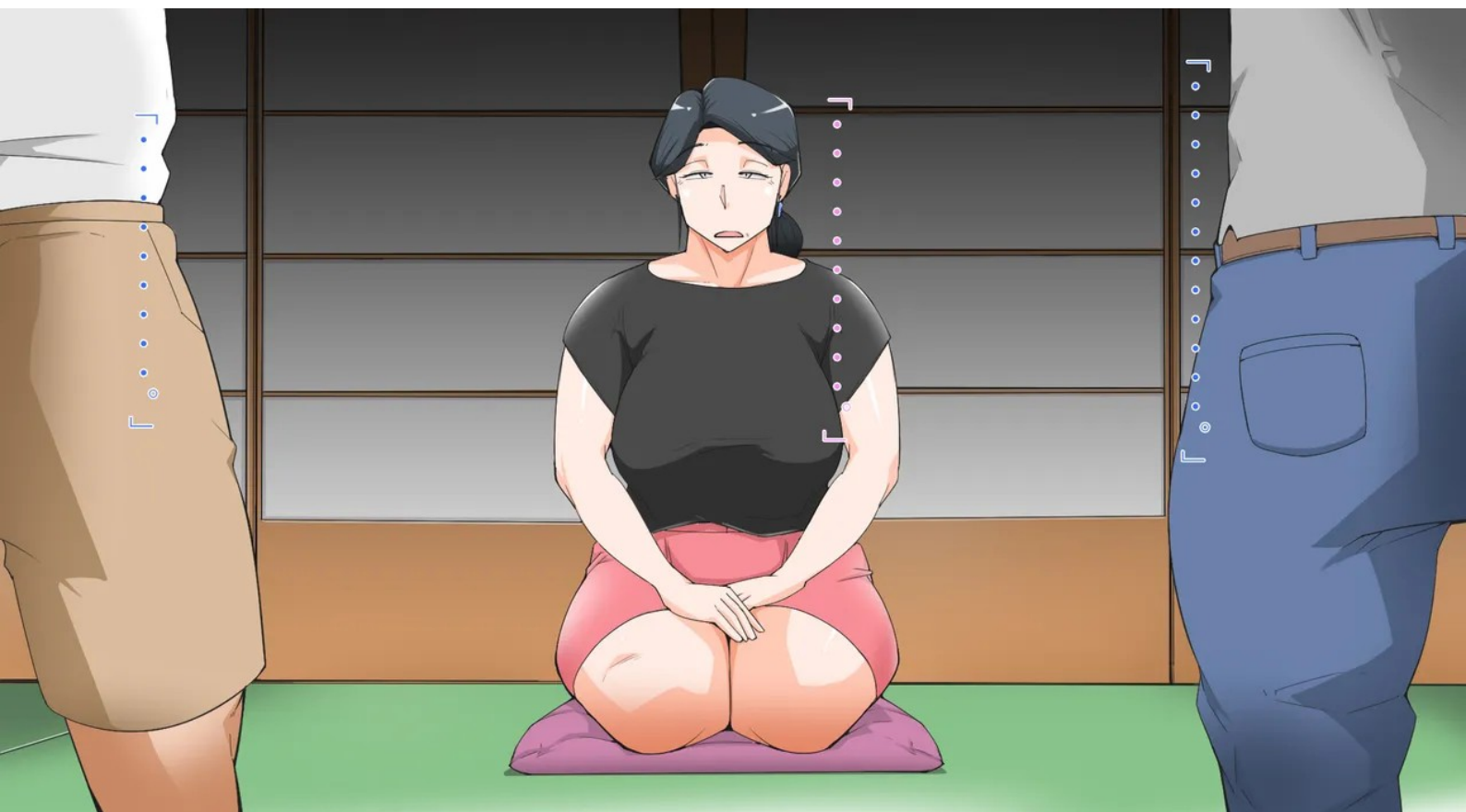
「…何…数…で…の…」

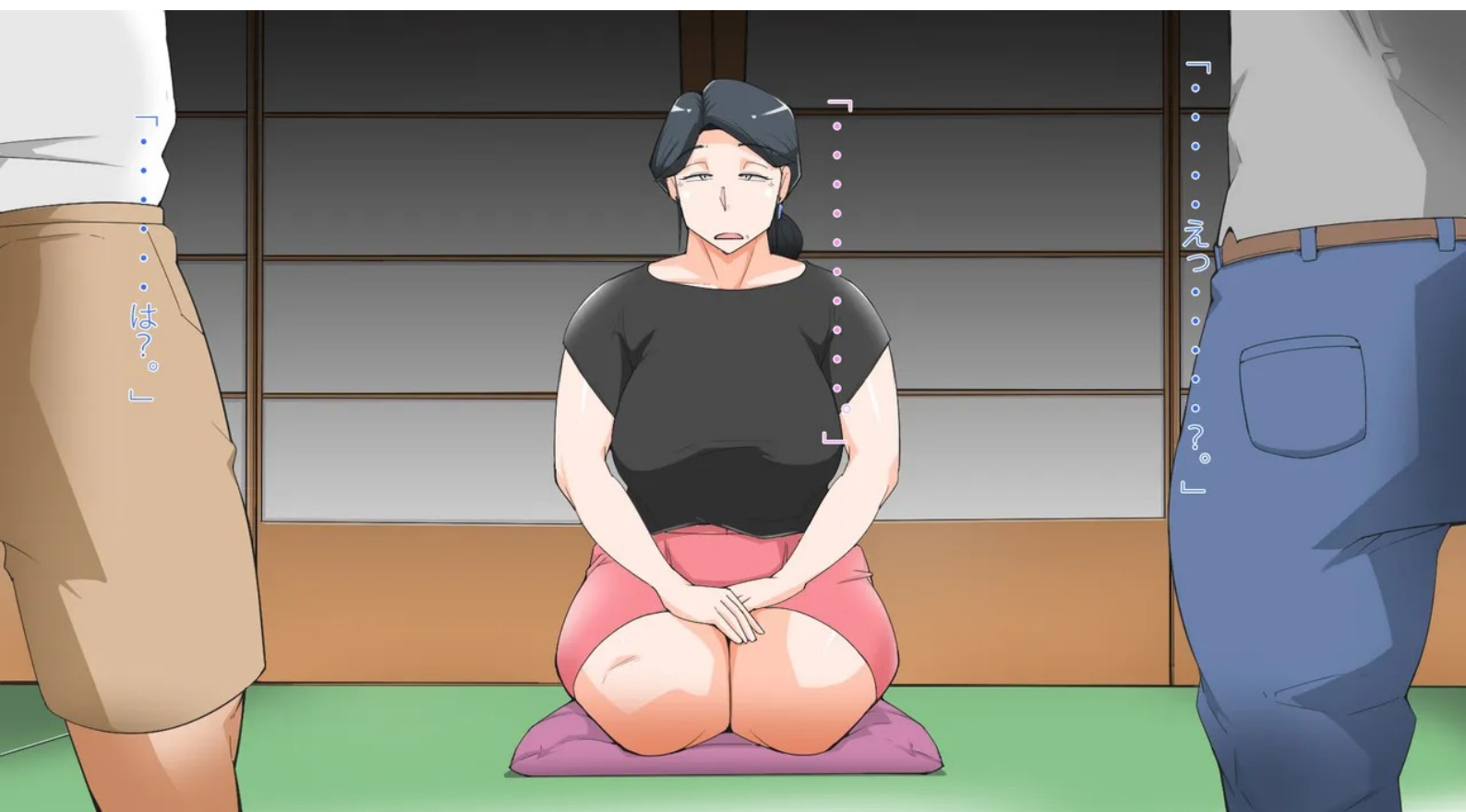
「…」

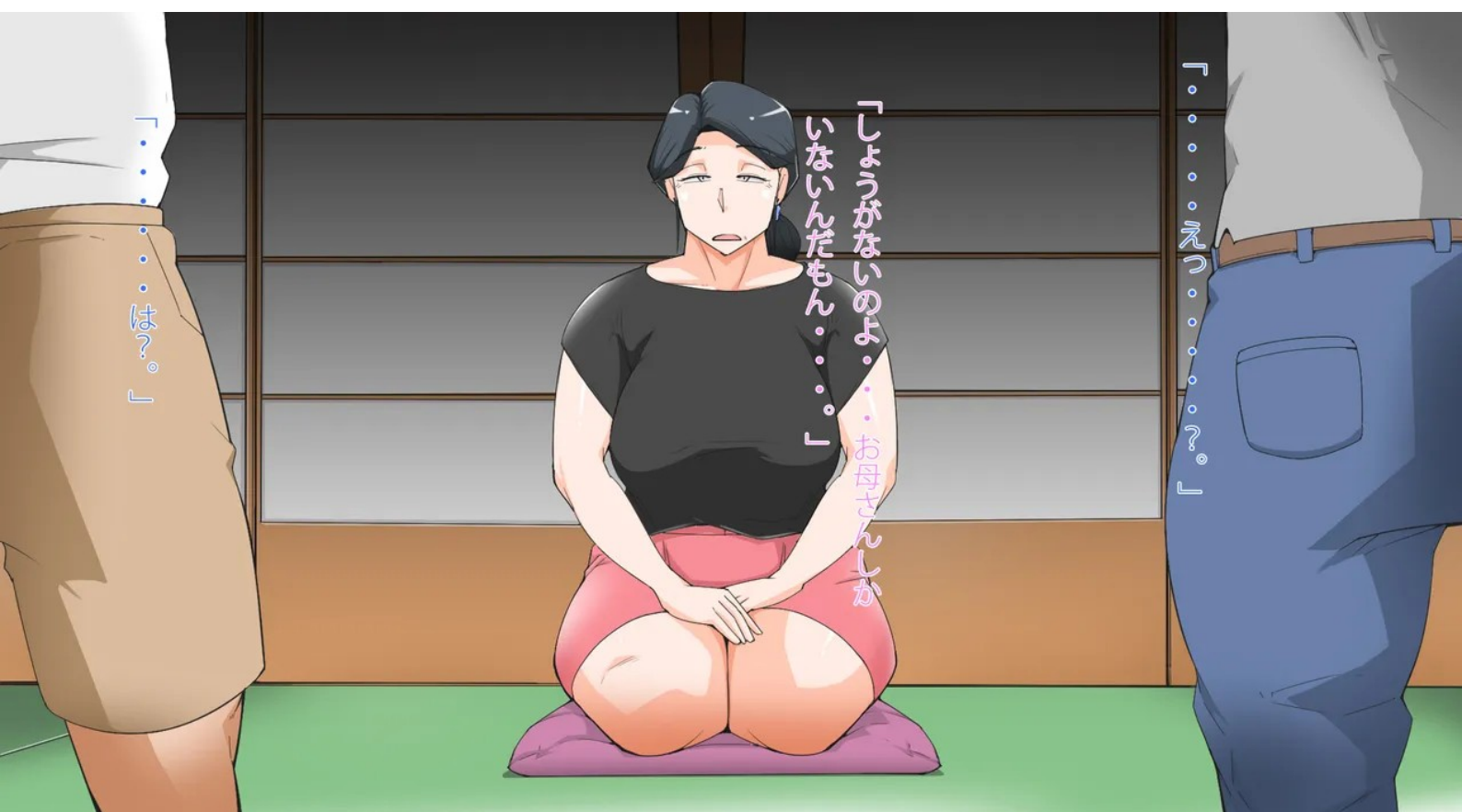








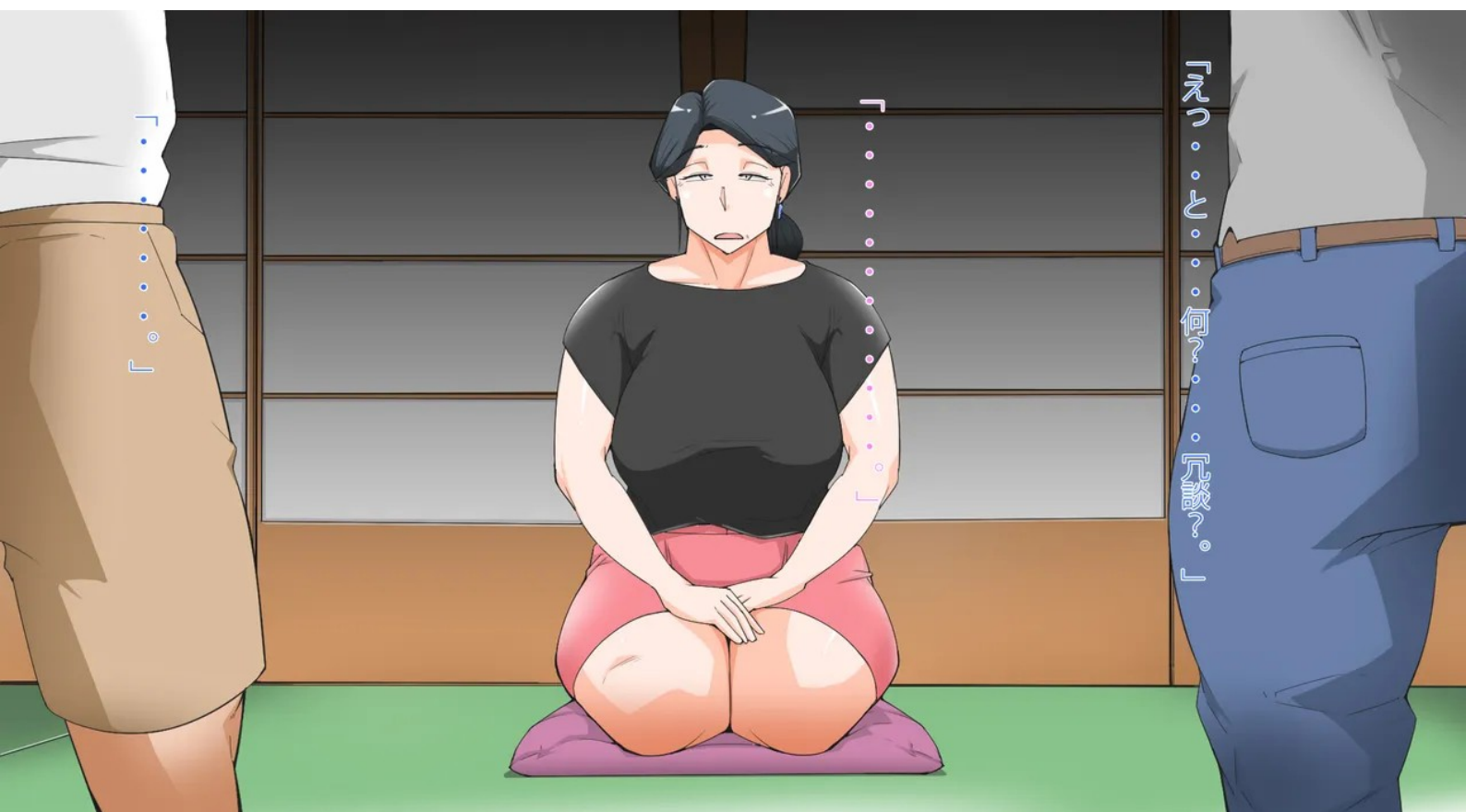




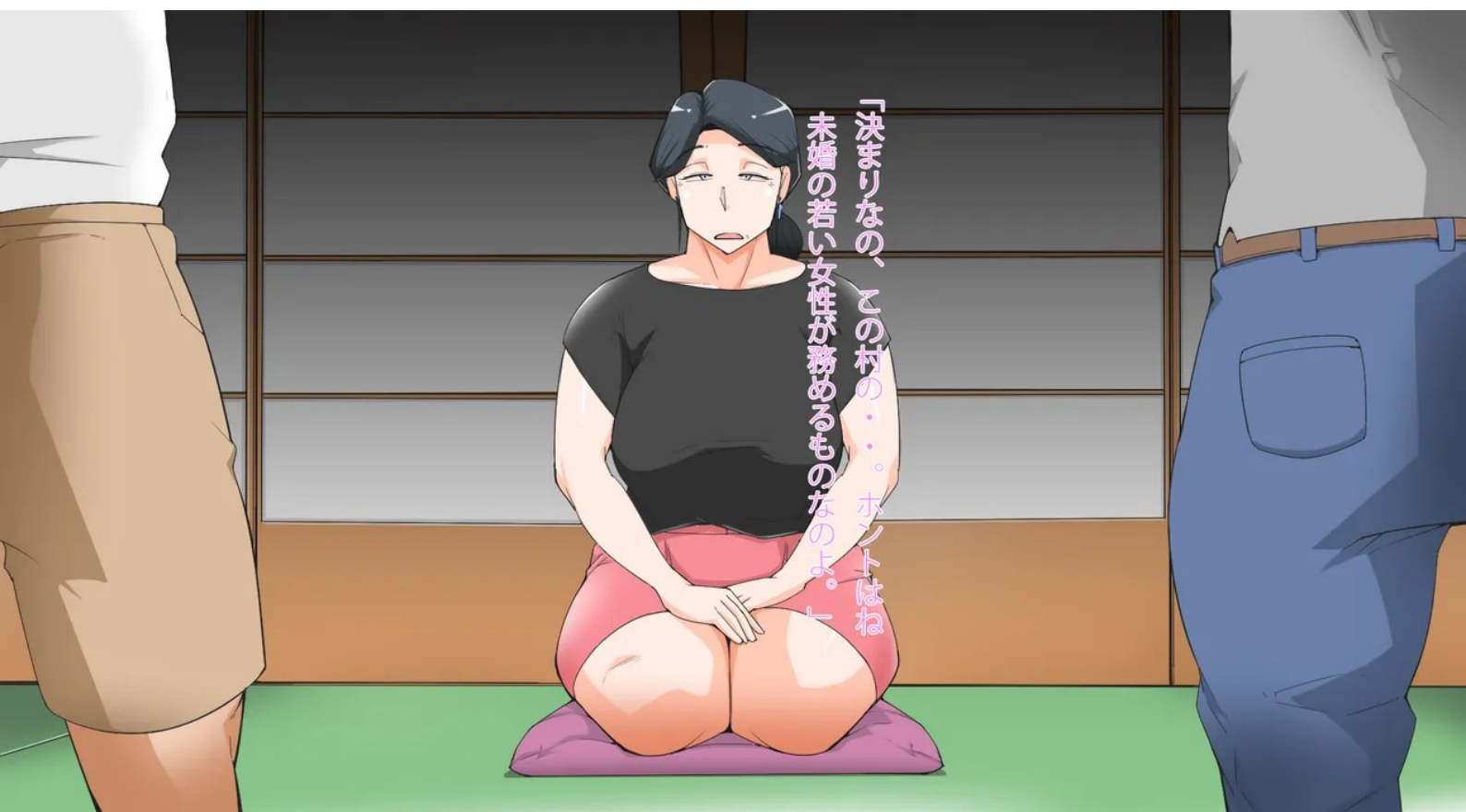
「……………」

「しょうがないのよ……お母さんしか
いないんだもん……………」

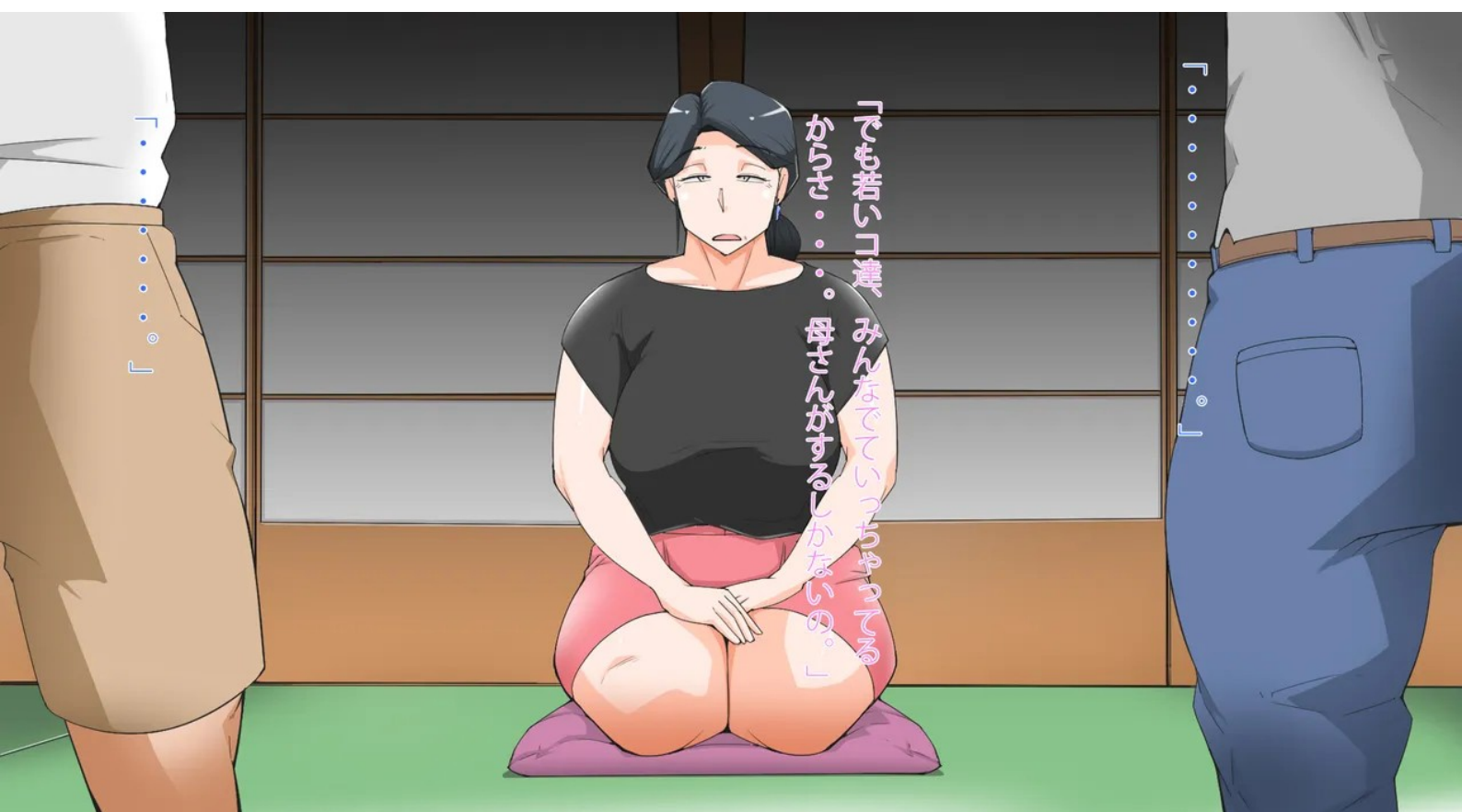
「……………は？」



セッ○ス。。。して。。。ほしい。。。言葉の意味は分かる、当然。でもその言葉がなぜ母の口から発せられるのが、まったく理解ができず、兄貴と二人、ただたちつくしていた。微妙な空気が部屋に漂い、充満した沈黙を母の言葉が再びやぶる。。。。



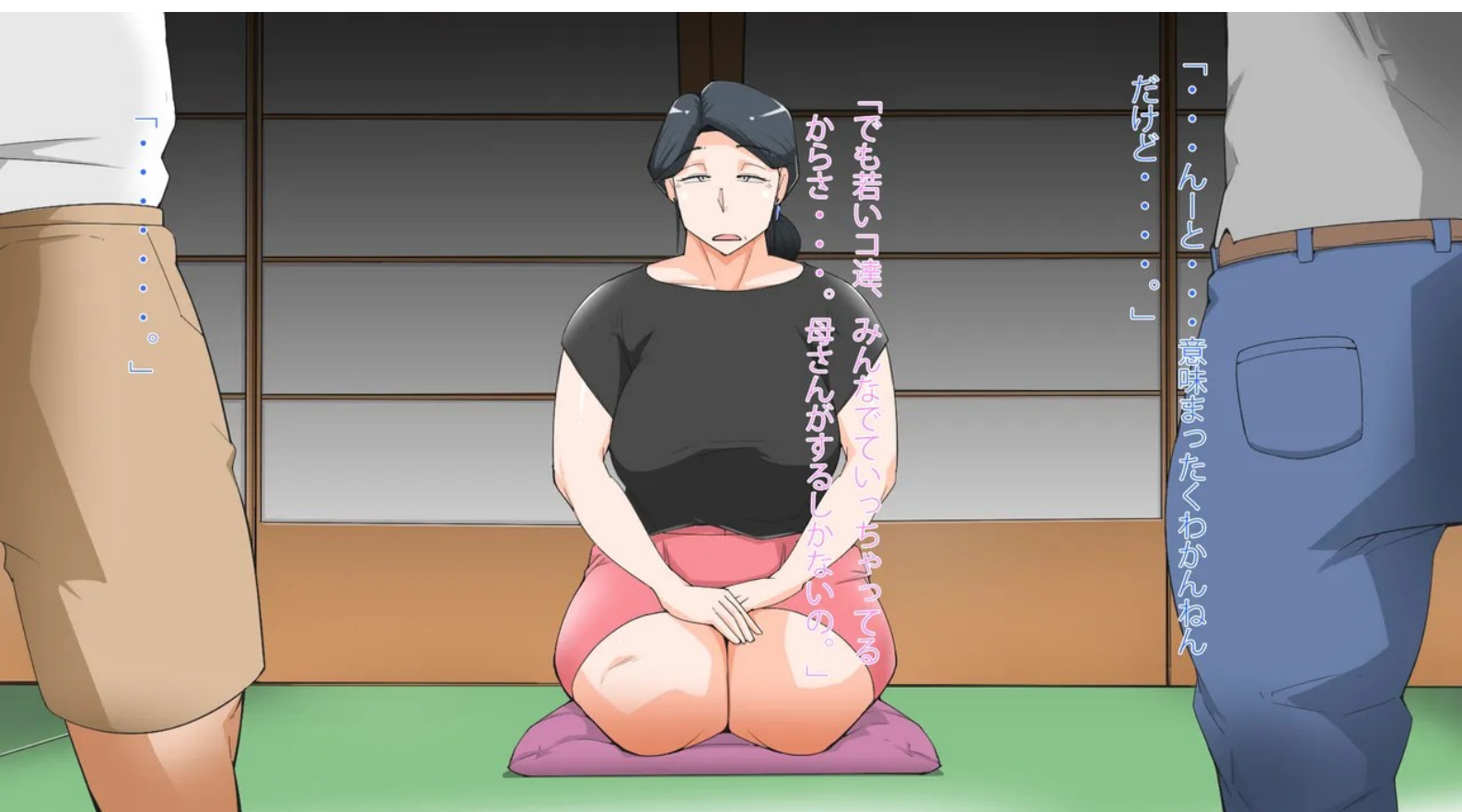
「決まりなの、この村の・・・ホントはね
未婚の若い女性が務めるものなのよ。」



「でも若い」違 みんなでいいっちゃって
からさ……。母さんがするしかないの。」

「。。。。。。。」

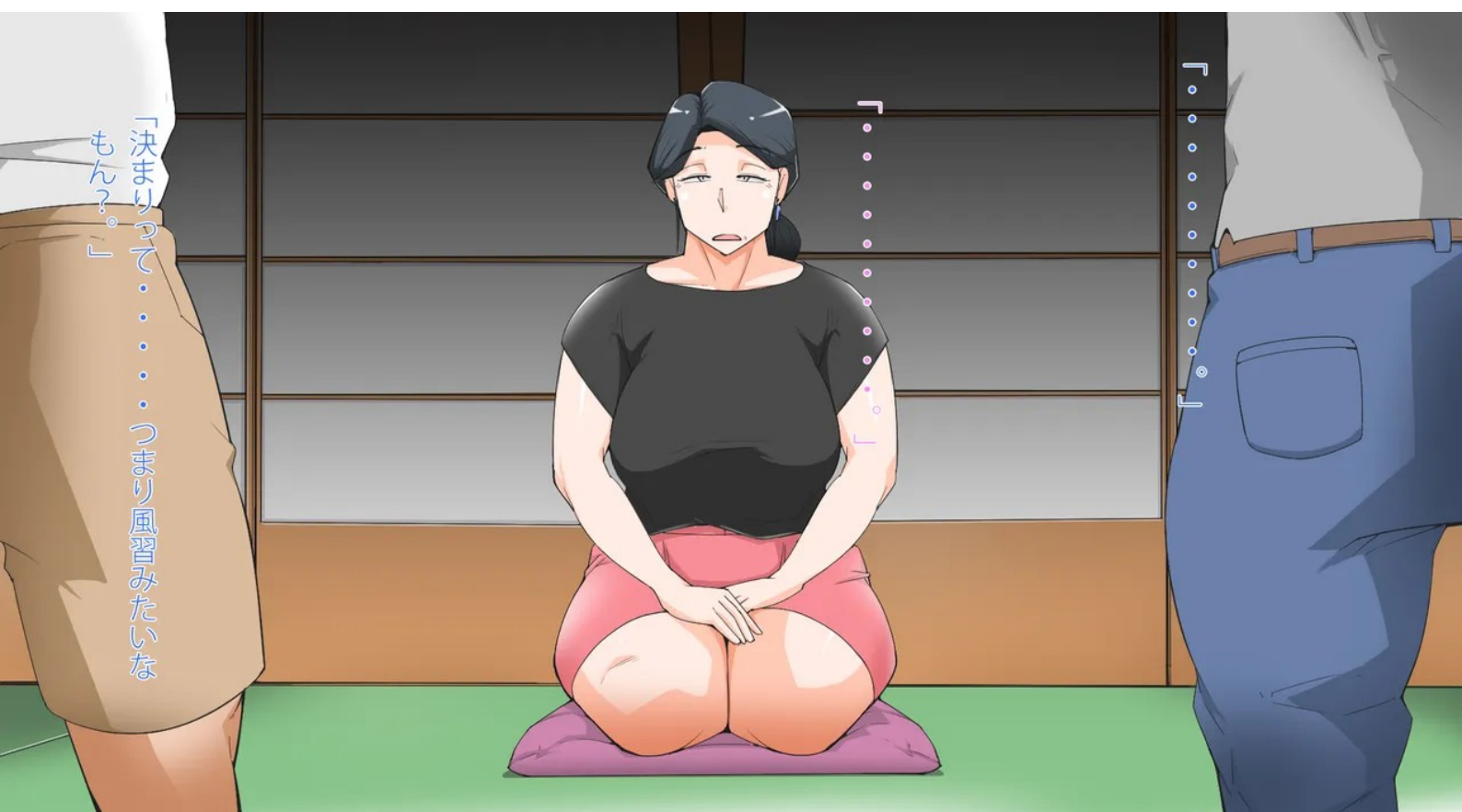
「。。。。。。。」



「……んーと……意味がたぐわかんねん
だけど……。」

「でも若い」違 みんなでいいっちゃってる
からさ……母さんがするしかないの。」

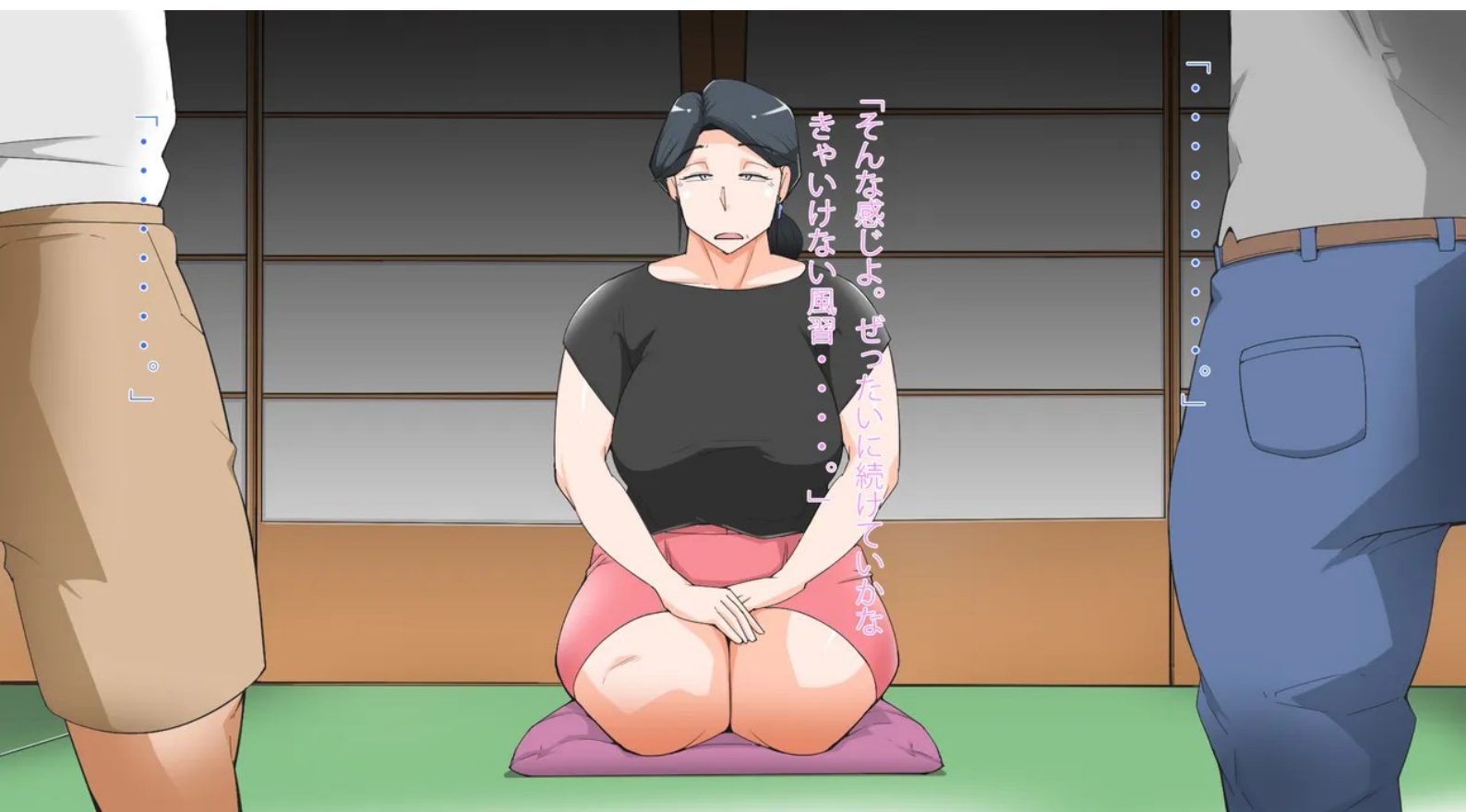
「……。」



「決まりって……つまり風習みたいなもん?。」

「……。」

「……。」



「わかったら、二人ともお風呂に入って身を
清めてきて。時間がないわ……。」

急ぎ立てられながら俺たちは浴室に向かう。
訳がわかりません。。。。

「。。。ありやあ。。。ボケたなお袋。」

「えー。。。まだ五十代だよ。。。かあちゃん。」

「関係ねえよ、こんななんもねえ田舎で独り暮らし
してんだからさ。。。おかしくなっちゃったん
だよ、きつと。。。。」

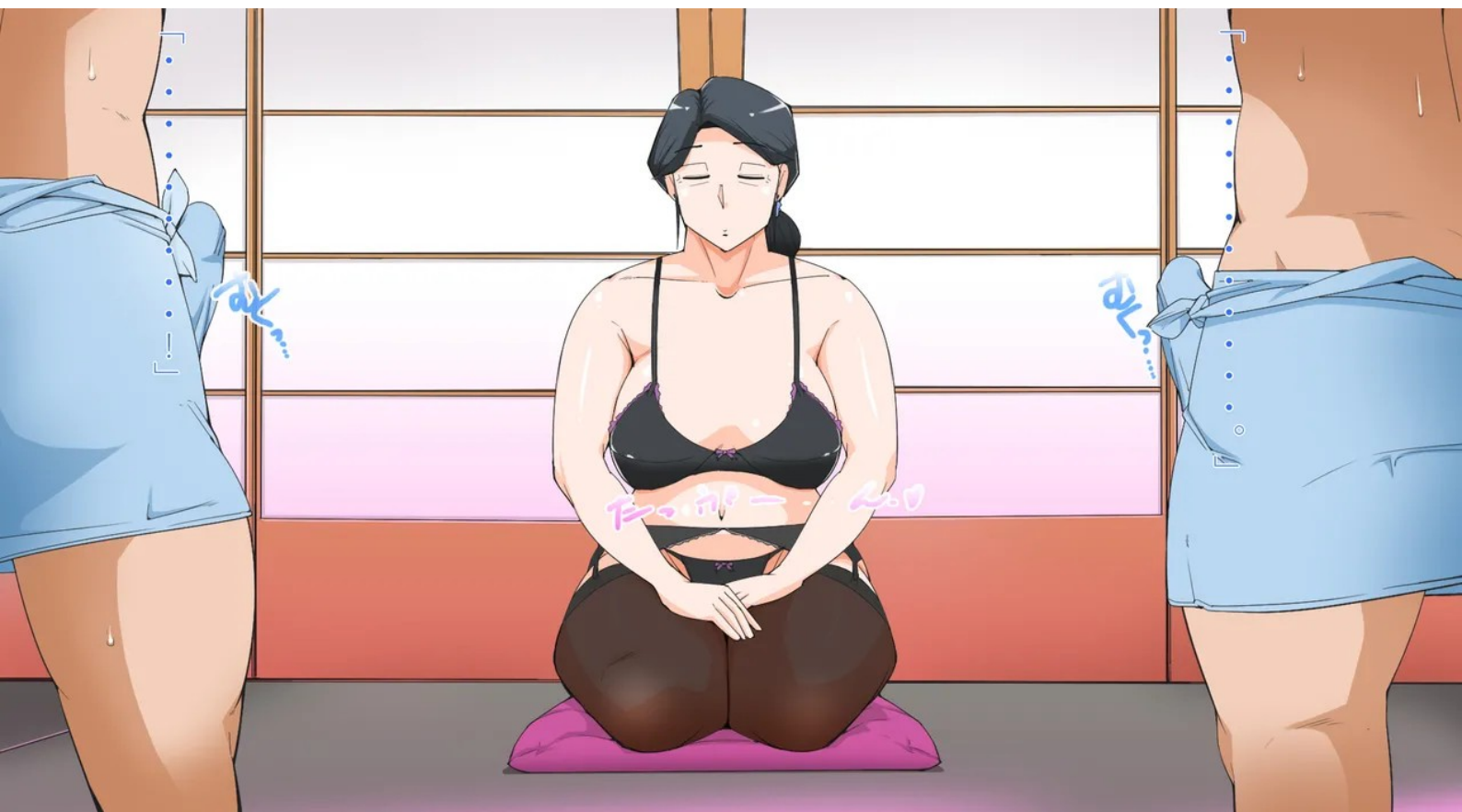
「。。。いや、いくら何でもそれは。。。。」

「あゝあ。。。俺はもう嫁の両親の面倒みてっからな
、お前がお袋の面倒みんだぞっ。」

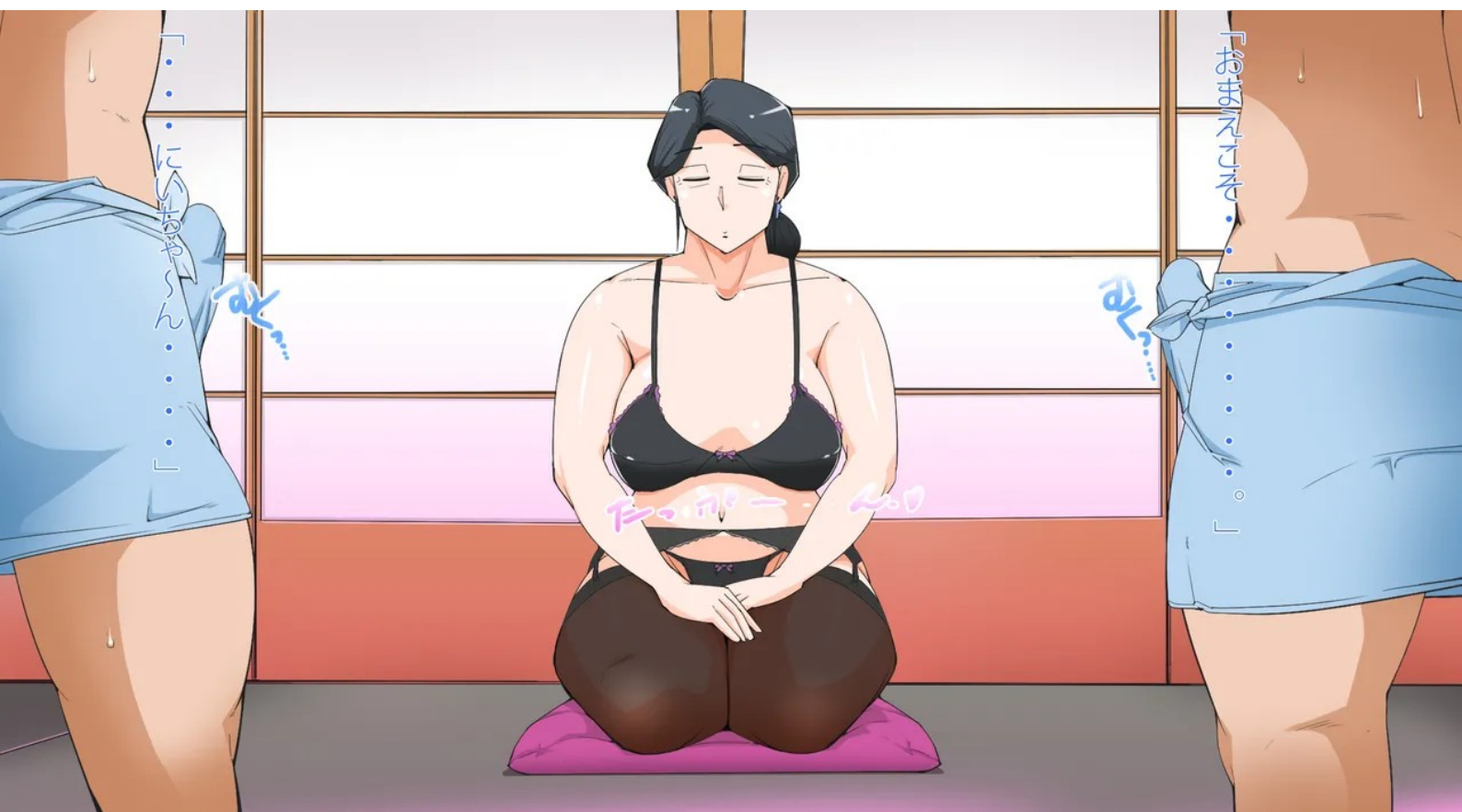
「えええ。。。まじ？」

とりあえず風呂からでた俺たちは、もう一度
母をさっそうと寝室の戸を開けた。。。。











「・・・勃たなかったらどうしようって心配してたけど・・・ムダだったみたいね・・・アホなコ達でたすかったわ・・・」

「おちんちん・・・」

「おちんちん・・・」

「・・・じゃあ始めましょっ、ほんと時間がないのよー!。」



お袋は聞きなれない神様の名前などを口にしながら、この奇妙な風習のいわれを説明しているが、俺達兄弟はそんな話などよりも、大人の男として初めて見る、母の艶やかな肢体に心を奪われ、話を聞くどころではなくなっていた。



「.....めっちゃいろいろぽ.....♡。」

「.....ぽんぽんぽん.....車だね.....」

「.....はあ.....はあ.....」



「♡.....いっ♡」

「.....」

「.....んじゃ・失礼して.....♡」



「.....おごひ.....♡♡♡」

「.....うおおお♡♡♡」

あや...♡♡

ぽかーん...♡♡









「・・・よくっ・・・躊躇なく
母親っ・・・にいけるっ
わねっ・・・」

「じつわけっこスリネタにさせて
もらってたから♡えへっ♡♡」

ベェッ!!
ベェッ!!
ベェッ!!

「♡♡♡♡♡」



「..えへっ..じゃないわよ..んっ♡」

「じつわけっこうスリネタにさせて
もらってたから♡えへっ♡♡」

んっ♡♡♡
んっ♡♡♡
んっ♡♡♡

「..♡♡♡♡♡」



「..えっ..じゃないわよ..んっ♡」

「おおっ♡肉厚でジューシーな..
現役感ありまぐりのま♡」っ♡♡♡

ちゅぽ♡♡♡
ちゅぽ♡♡♡

「.....♡♡♡♡」







「あああっ！・・・おっ・・・きゅん」
「うっ・・・わっ！♡やべえ超」ふんするっ♡♡







兄貴にガン突きされながら、思わず漏れ出る嬌声を必死にこらえようとしている母を見ながら、中坊の頃、母や母の下着をオカズにしてオナニーしまくっていたことを思い出していた。五十路を迎えた母だが、大人になった俺達にとっては母はあの頃よりも何倍も魅力的なセックスシンボルへと変化を遂げていた。。。。。

「……………はあっ……………はあっ……………うっ……………
圭太……………」

「……………♡……………」







「あんっ♡ふっ♡二人ともっ♡しっかり大人になっ
て♡あんなっ♡かあさんっ♡うれしいわっ♡♡♡」

「…はあっ♡はあっ♡」

「…はあっ♡はあっ♡すっごく気持ちいいっ♡♡♡」

「んっ♡んっ♡んっ♡」

食るように母の体を楽しんでいたが、二時間ほどがたった頃、

「……………あっ……大変っ……もうこんな時間……………!。」

すくつと立ち上がって急いで浴室に向かう母。

「アンタ達の相手だけしてるわけにいかないのよ……………まだこれから何件か回らないと……………」

いそいそと身支度を整えながら、母はこの奇習のルールを説明してくれた。聞けばあと二日の間に村中の成人男性と交わらなければならないらしい。三十年前、母がまだ独身だった頃に務めた時に比べれば、大分、人口も減って負担も軽くなつてはいるようだが……………。

「それじゃ行ってくるわね。帰りはちょっと遅くなるかもしれないから……………夕飯は用意してあるからねっ。」

いつものさばさばとした母親の様子も、さつきまでの乱れたオナナの顔を思い出すと、ギャツプ萌えが止まらない……………。

「……………おい……………」

「……………うん……………」

俺たちはこっそりと母の後を追った……………。

大き目のケツをこぎみ良く揺らしながら、母は村の集会場へ入っていった。。。。

「。。。もう半勃ちしてきた。。。。。」

「。。。俺も。。。。。。。」

中に入ると閉め切った奥の部屋から母の声が漏れてきた。

「。。。すみませんね、私なんかで。。。。。」

「いやいや、皆喜んでるよ！ウチの倅もめったに帰ってこねえのに、陽子ちゃんの名前きいたらすっとなで帰ってきたよっ

」♡。」

しばらく田舎のご近所付き合い的な談笑が続いた後、すうつと静かになりこそこそと物音が聞こえ始めた。。。。。

「。。。そろそろ。。。。。。。」

「。。。おう。。。。。。。」



扉の向こうでは全裸にされた母に数人の男達が
群がっていた。仲のいい同級生の親父や、近所
に住んでる農家のオッサンなど、男達の顔ぶれ
はいずれも、子供の頃から見慣れたもの達ばか
りだ。。。。。

これからこの連中に母ちゃんが。。。そう思うと
嫉妬や怒りや、いろんな感情が沸き起こってめち
やくちゃ興奮してきた。









あむ♡はむ♡♡ひよんな♡♡♡♡♡

じゃーん♡

んん♡

♡

んん♡

じゃーん♡

んん♡

「ふっ♡ふっ♡陽子ちゃんのどすけべフェラでもうイキそうじゃ♡♡♡♡♡」



「・・・すげえお袋♡クンニでイカされながら
ごっくんして・・・♡♡♡。」



「.....俺も後で飲んでもらお.....♡♡」
「♡♡♡♡♡.....うおおお.....♡♡♡♡♡」

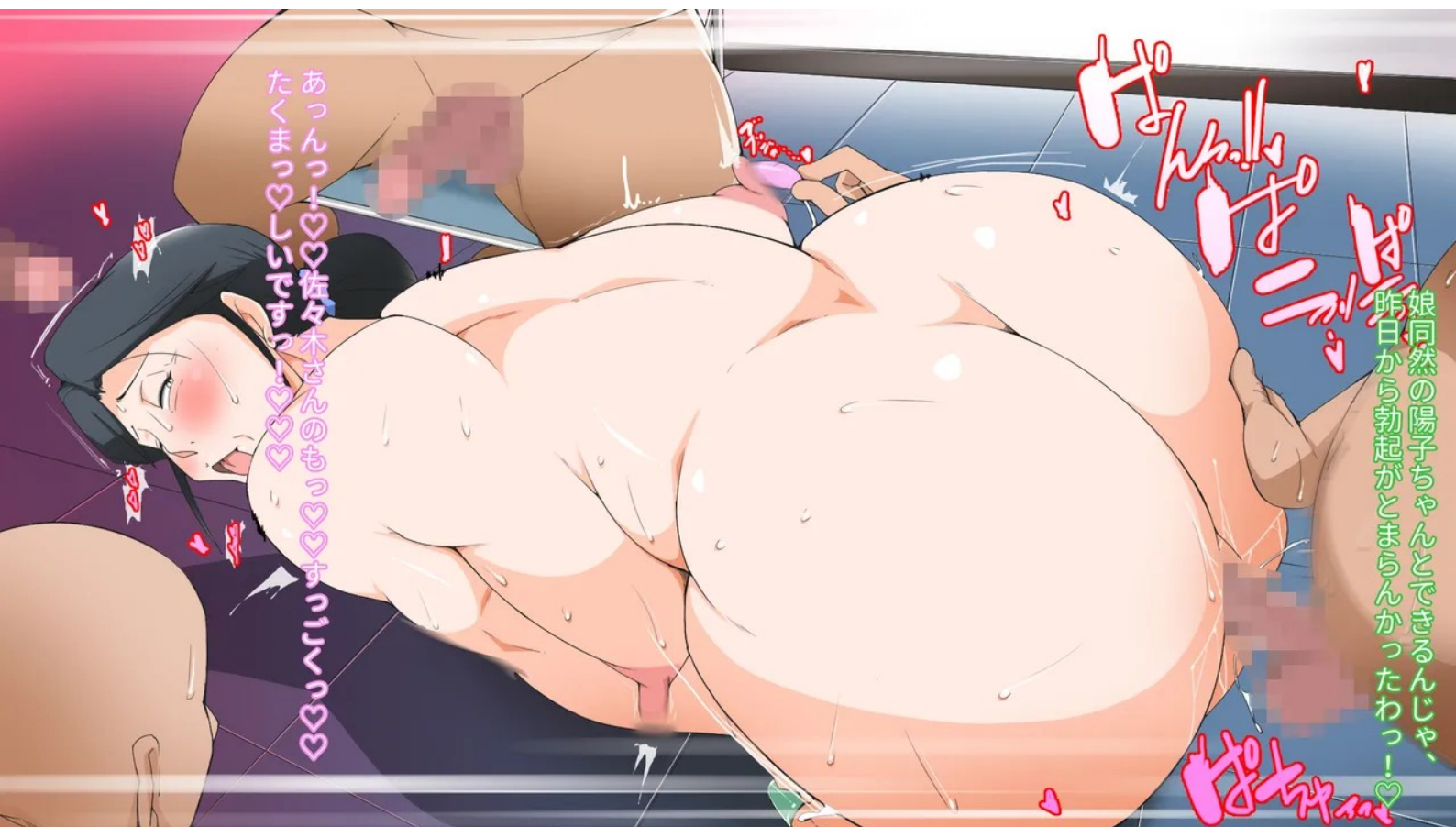


んっっっ♡んっっっ♡んっっっ♡んっっっ♡

ゴッゴッゴッ
ゴッゴッゴッ
ゴッゴッゴッ

ふんっ♡ふんっ♡ふんっ♡ふんっ♡若い女よりっ♡
二人ぐらい生んだお♡んこの方がっ♡
よくなじむわいっ♡♡

ゴッゴッ



あつー♡♡♡佐々木さんのもっ♡♡♡す♡♡♡へ♡♡♡
たくまっ♡♡♡です♡♡♡

娘同然の陽子ちゃんときるんじや、
昨日から勃起がとまらんかったわっ♡

おちんち



うれっ♡しいですわっ♡♡♡遠慮なく中に出しちゃって
くださいねっ♡♡♡わたしもう♡おわっ♡入来すからっ♡♡♡

娘同然の陽子ちゃんとできるんじや、
昨日から勃起がとまらんかったわっ♡♡♡

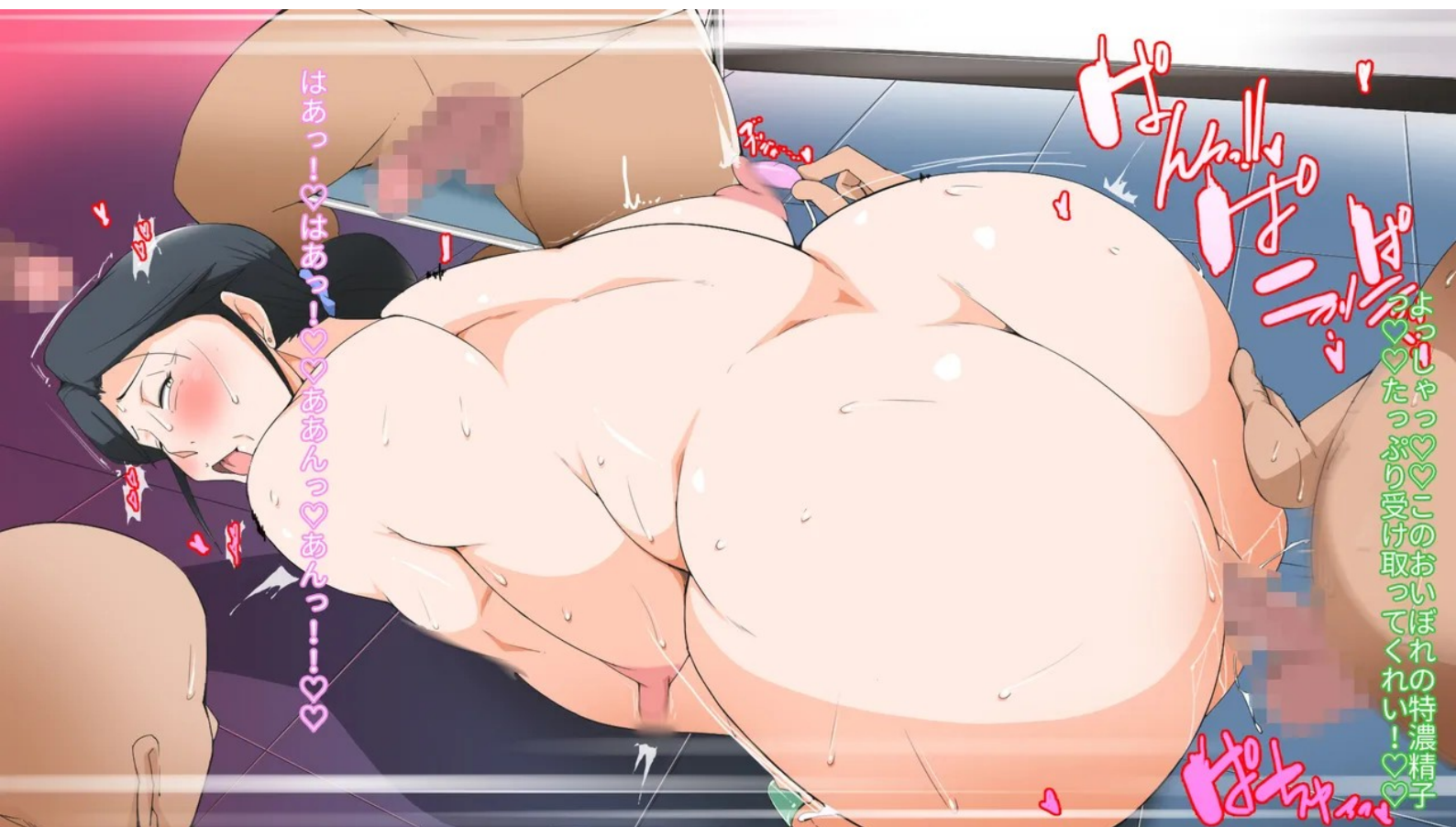


うれっ♡しいですわっ♡♡♡遠慮なく中に出しちゃって
くださいねっ♡♡わたしもう♡おわっ♡入来すからっ♡♡♡

ゴッゴッゴッ
ゴッゴッゴッ
ゴッゴッゴッ

そうが♡母親の務めを終えてっ♡♡♡
人の女に戻ったっちゅうことじゃなっ♡♡♡

ゴッゴッゴッ



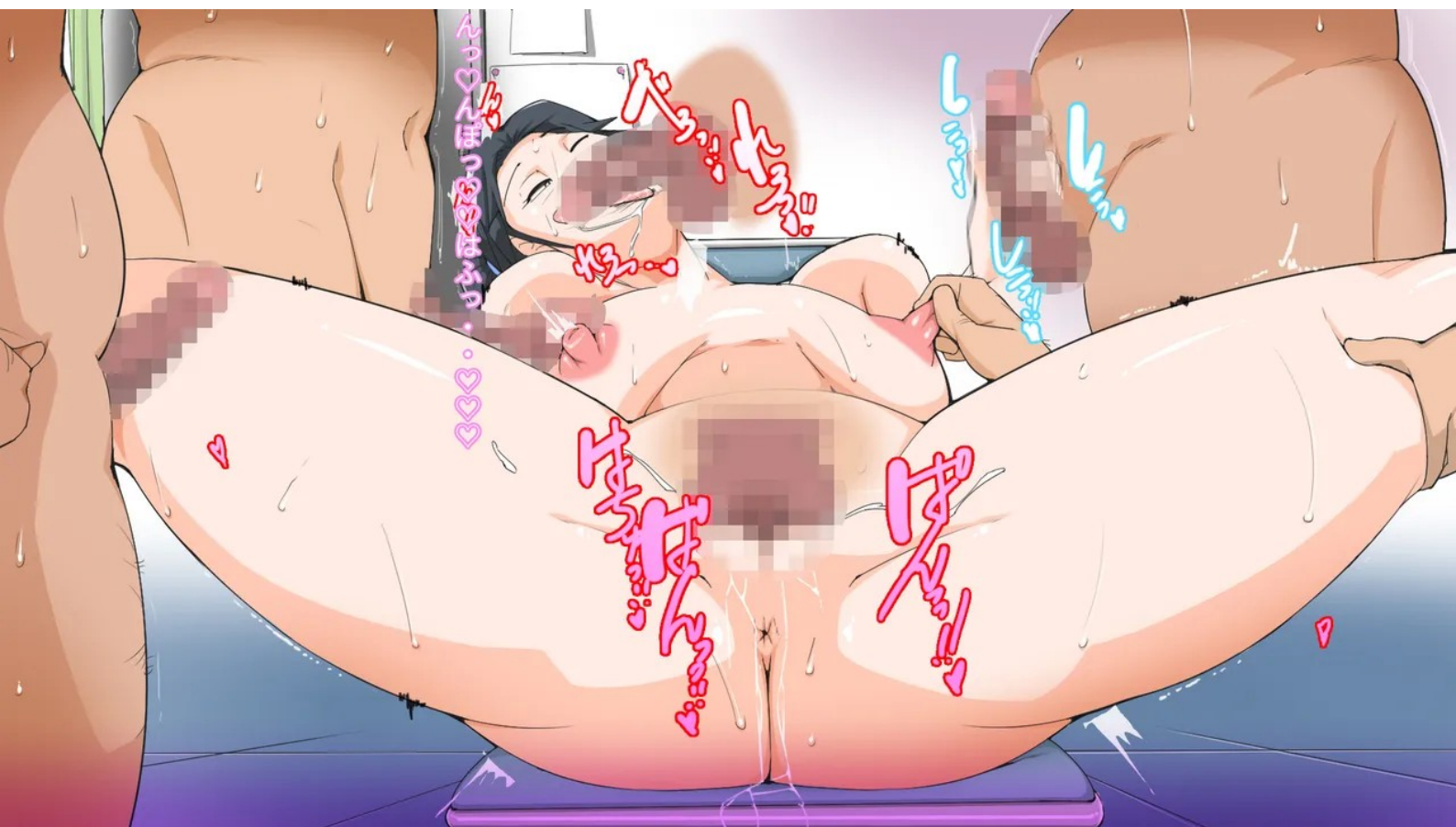
はあっ！♡はあっ！♡ああんっ♡あんっ！♡♡♡♡♡

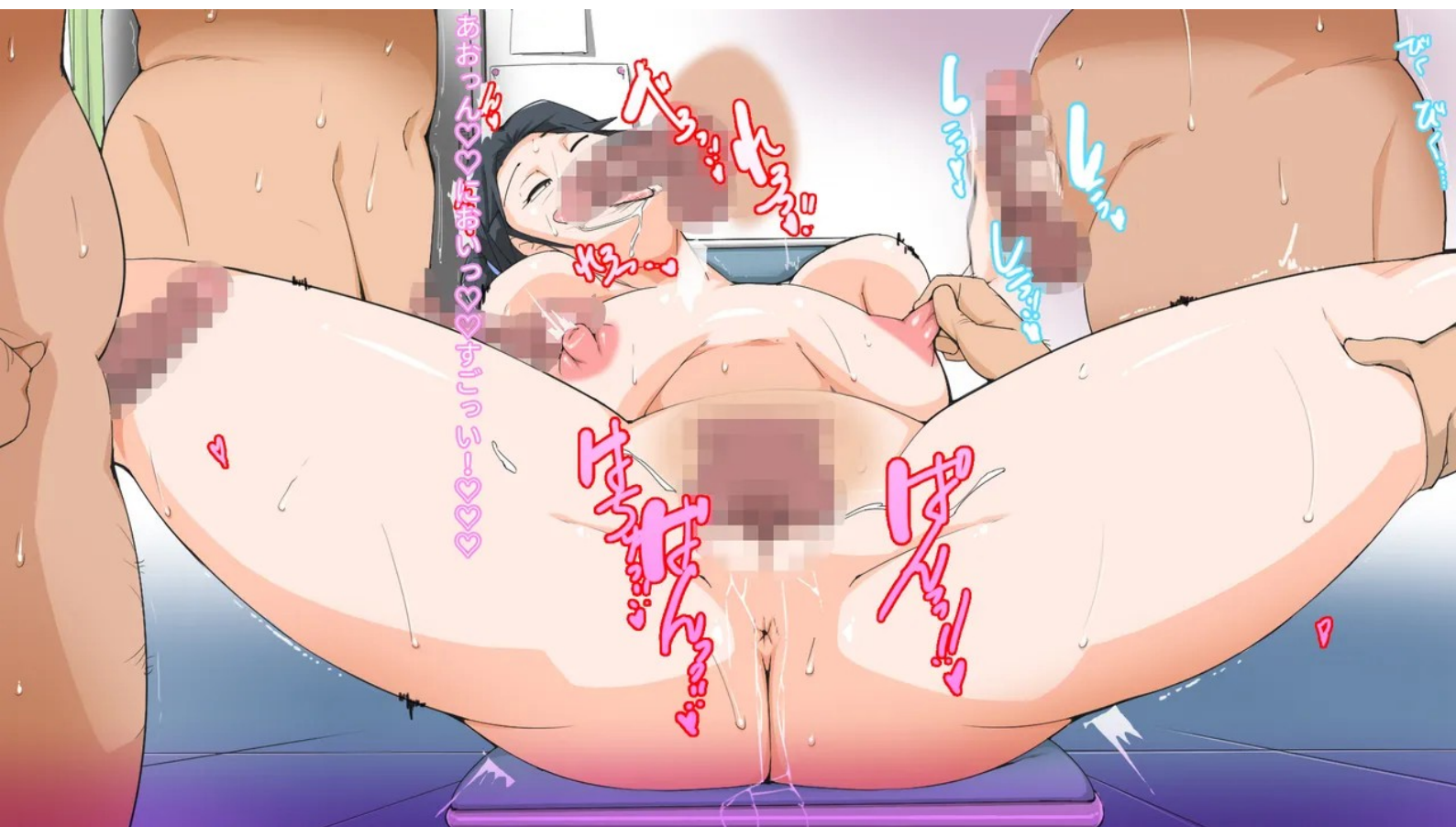
ゴーン！ゴーン！ゴーン！

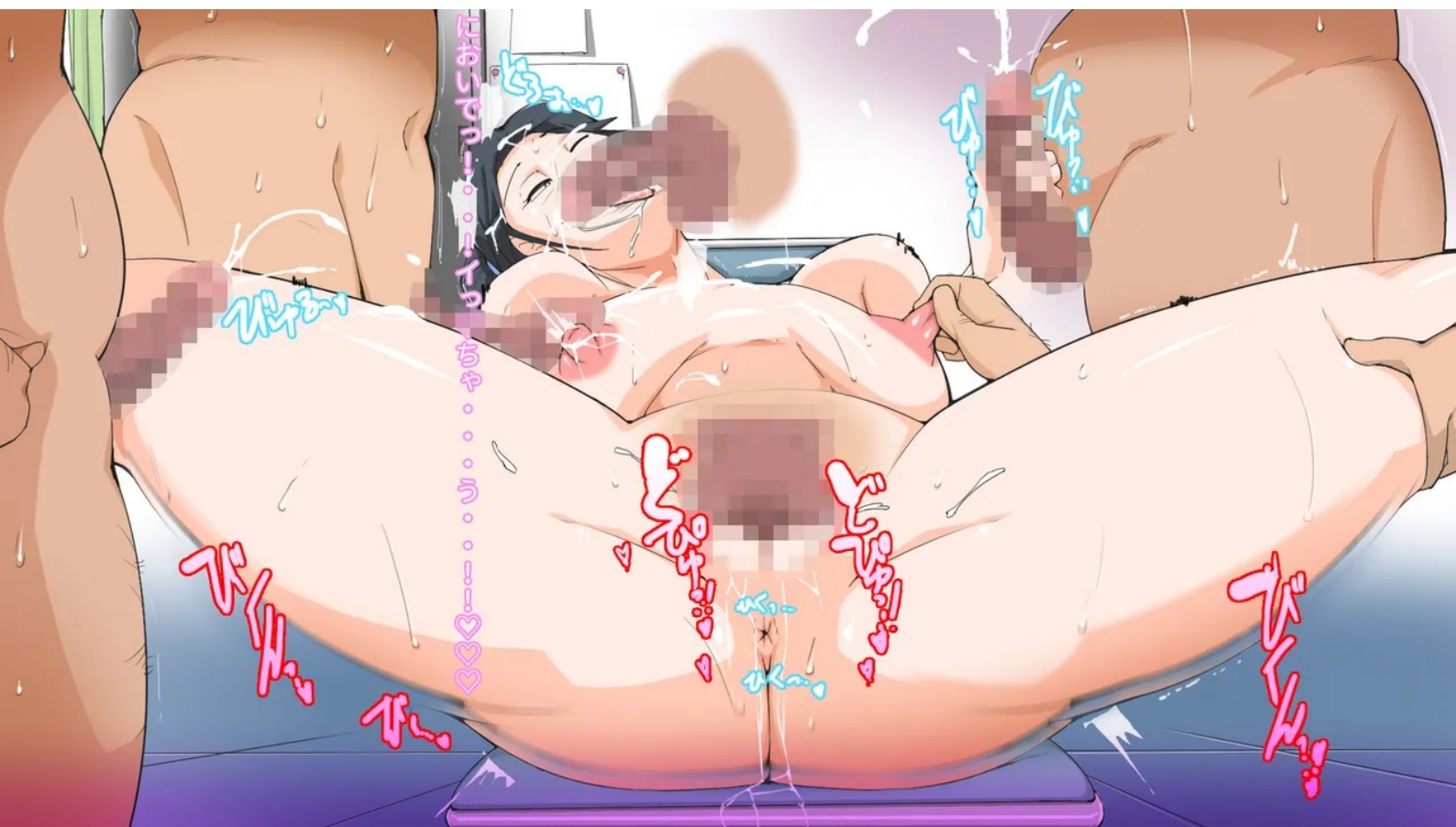
ゴーン！

よっしやっ♡このおいぼれの特濃精子♡♡♡♡♡たっぷり受け取ってくれい！♡♡♡♡♡









「くっそ・・佐々木のじじい達、ひとんちの母ちゃん
で好き勝手やりやがって・・・!」

「.....まあ、このふざけた風習のおかげで俺ら
も母ちゃんとヤレるんだし.....そろそろ
お開きみたいだから、戻ろう兄貴。」



「ふうっ……ただいまぁ……。。。」

「はぁ♡はぁ♡おふへっ♡もっかい♡よ
っようっ♡♡♡」

「えっ？……無理っ！今日もう無理っ
！ん？……まさかあんた達……。」

「……たのむよぉ……むらむらして寝れない
ようっ♡♡♡♡」

「……見たのか……もぉ……
……じゃあ口で抜いたげるから……それで
かんべんして……。」



おっさんどもの精子なんかより！♡♡♡
息子の精子の方が絶対美味しいから♡♡♡
全部飲み干してねっ！♡♡♡

ちゅぽ♡♡♡

ちゅぽ♡♡♡

ぽんぽん！♡♡♡ぽんぽん！♡♡♡ぽんぽん！♡♡♡

Y

ぽんぽん！

ぽんぽん！

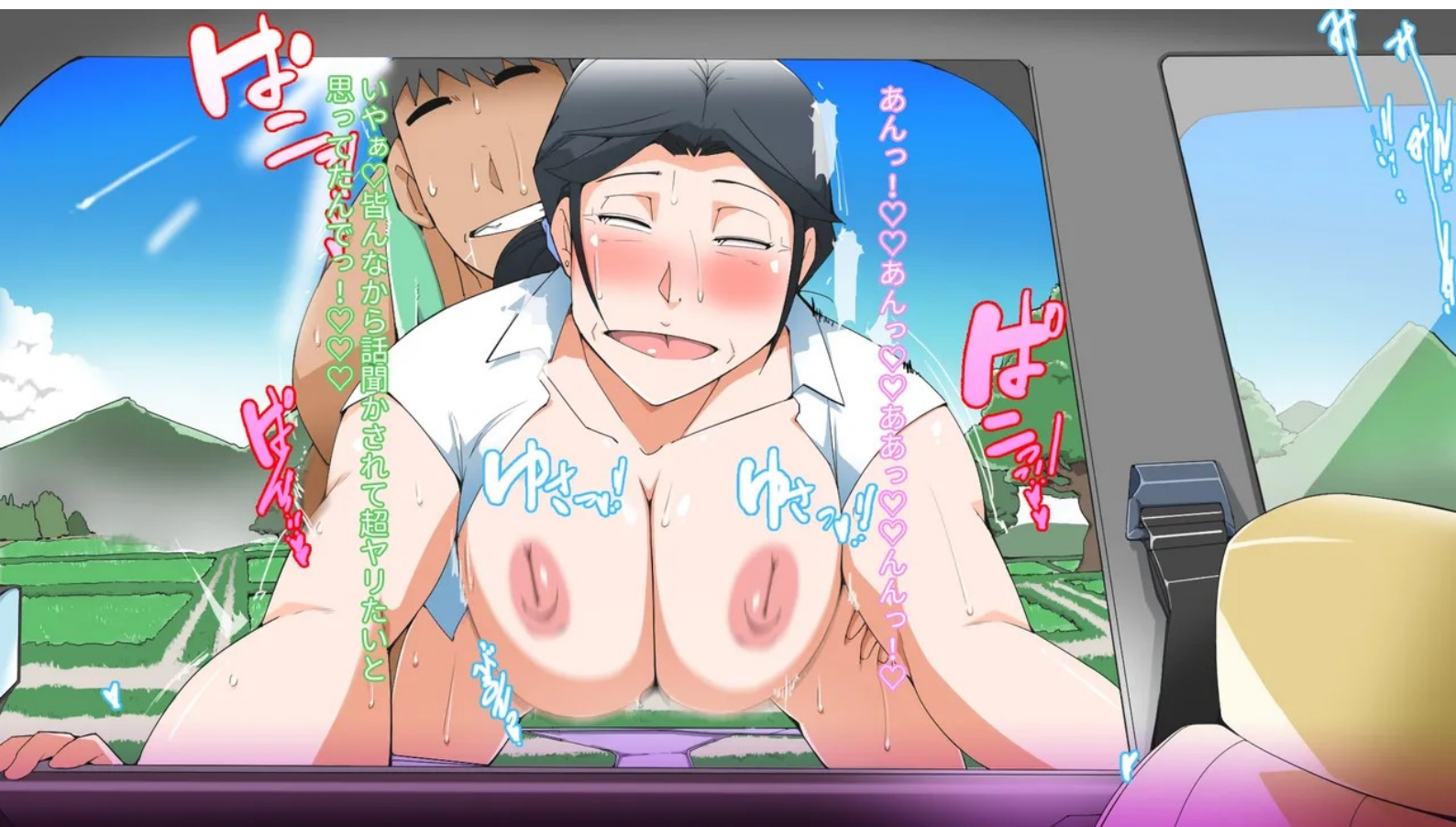


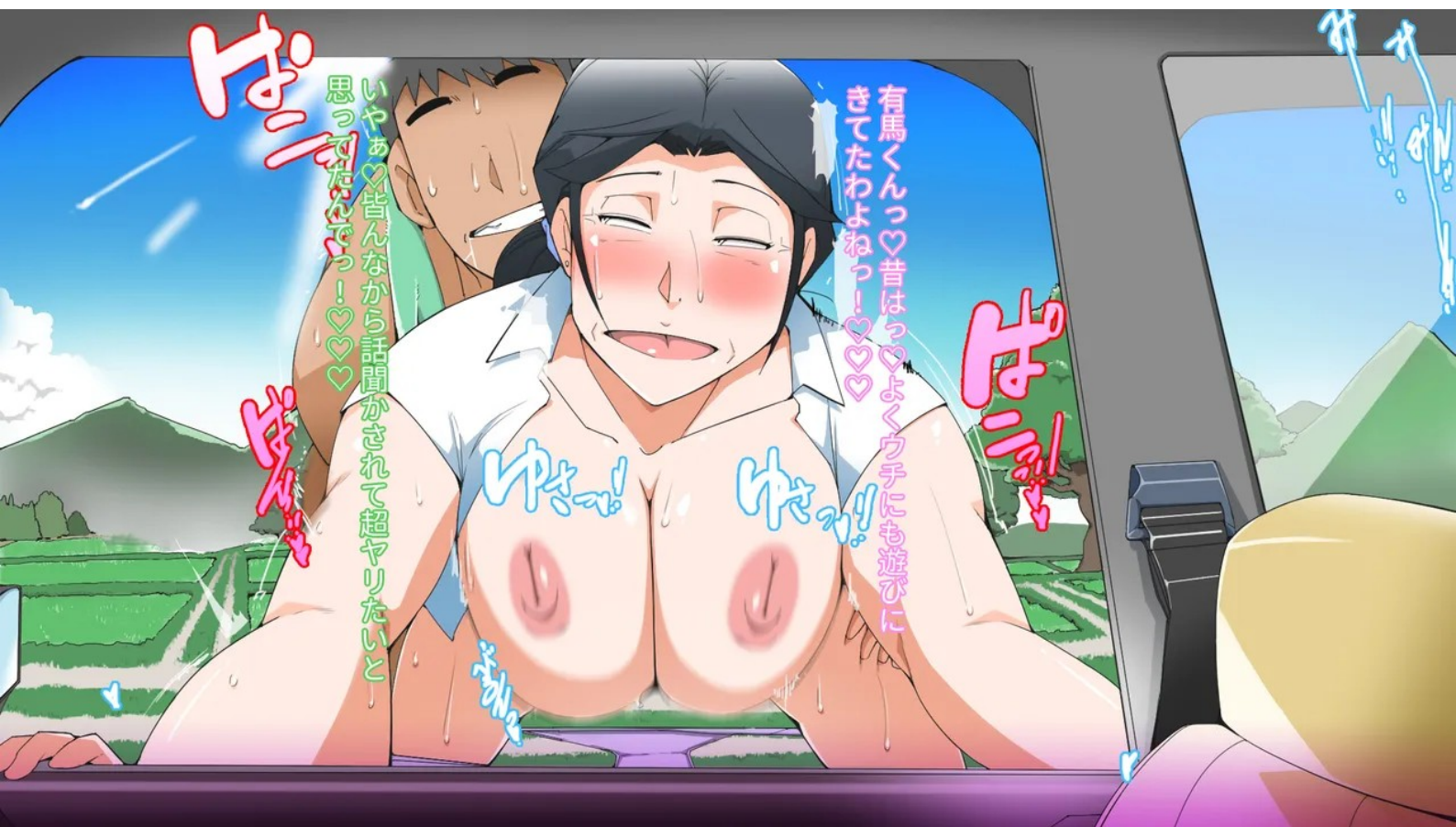












ぱー

いやあ♡みんなから話聞かされて超ヤリたいと思っただんでっ!♡♡♡

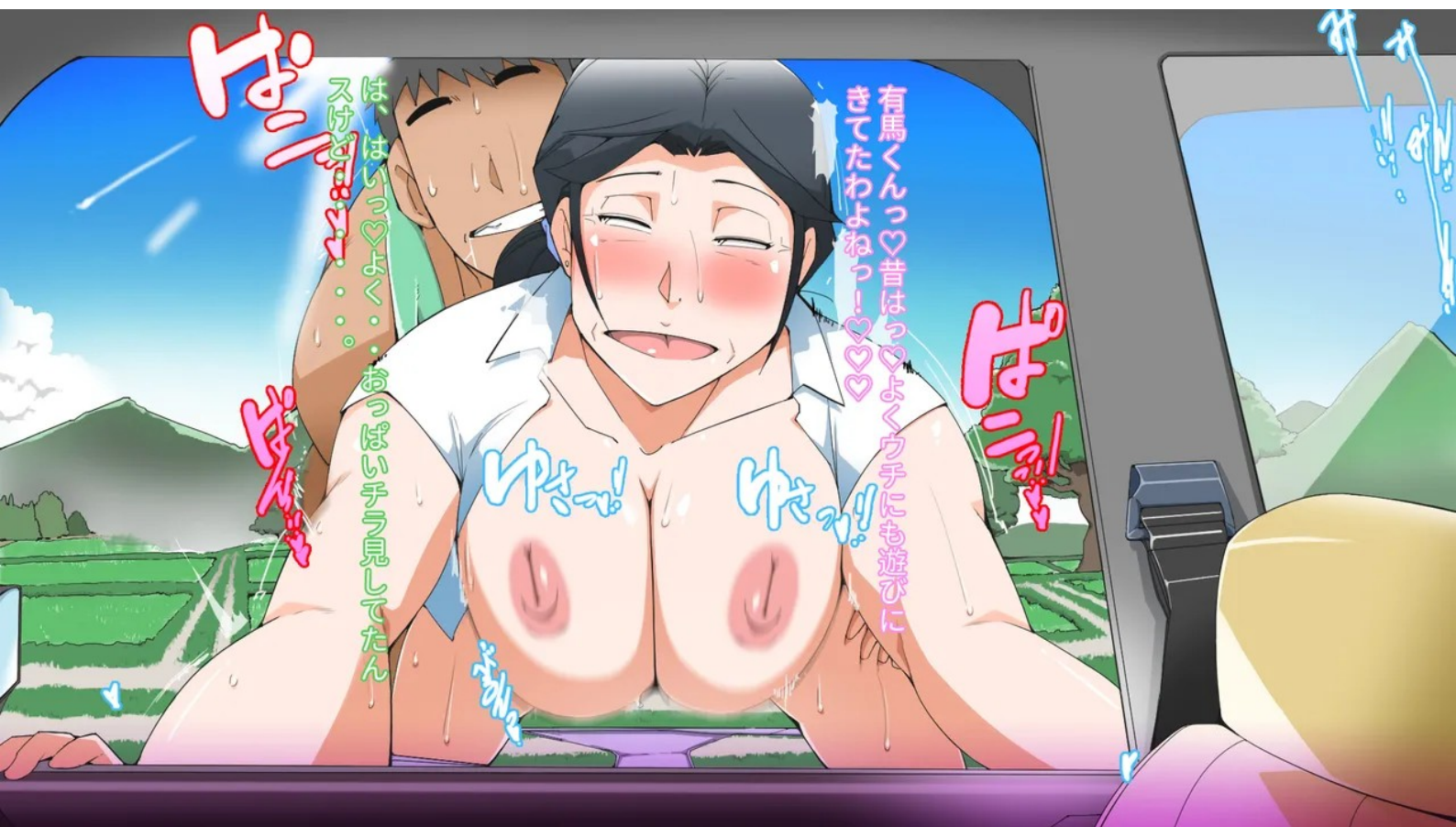
有馬くん♡昔はっ♡よくウチにも遊びにきてたわよねっ!♡♡♡

ぱー

ゆさっ!

ゆさっ!

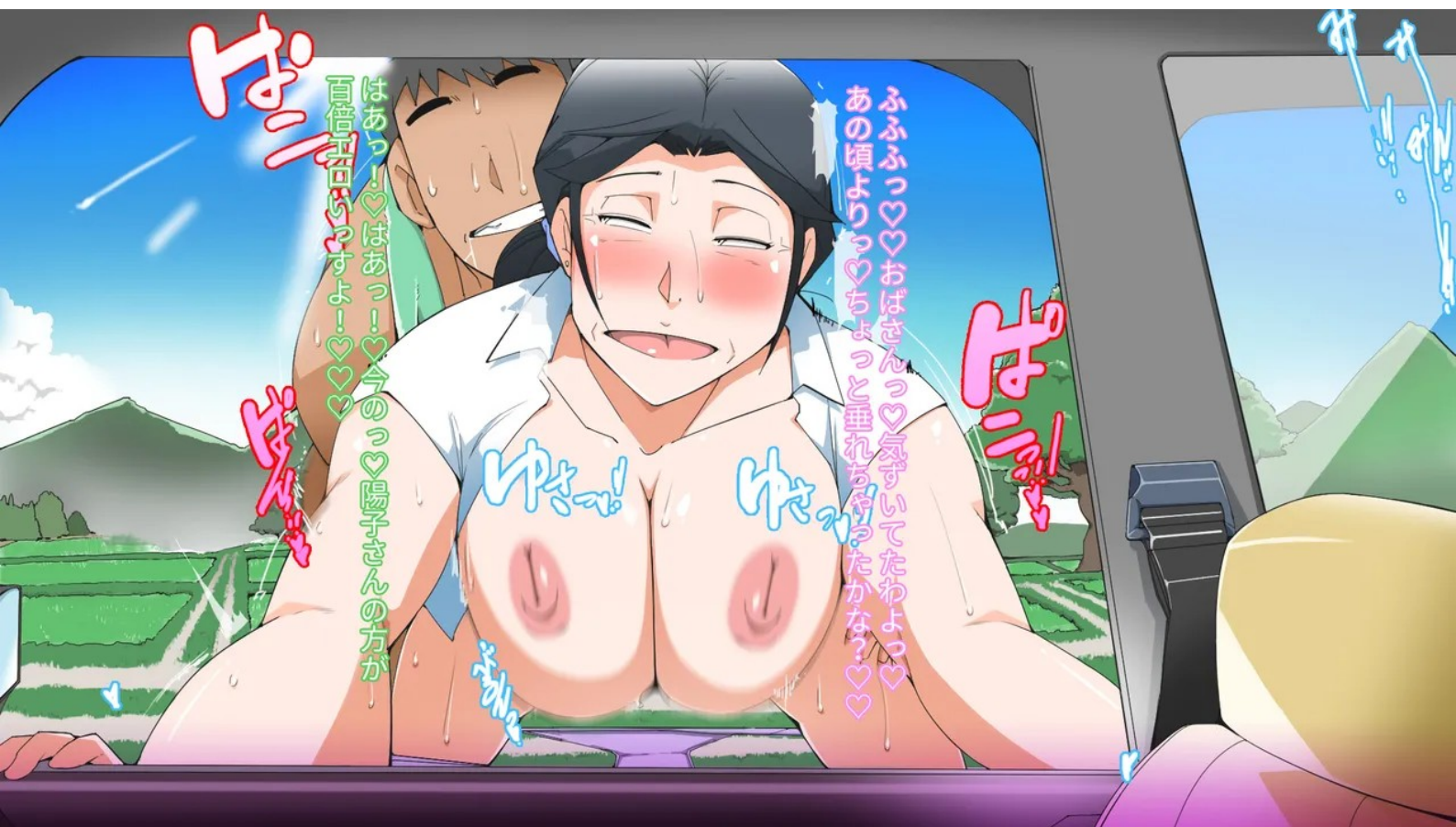
もっ



有馬くんっ♡昔はっ♡よくウチにも遊びにきてたわよねっ!♡♡♡

は、はいっ♡よく...おっぱいチラ見してたんすけっ!♡♡♡











陽子ちゃんで助かったわー♡最近
すっかり弱ってたもんだからさー！

んっ♡んっ♡♡♡んはっ♡♡♡

ちゅぽっ♡

んっ♡

んっ♡

ちゅぽっ♡

んっ♡

中に入ん♡



陽子ちゃんで助かったわー♡最近
すっかり弱ってたもんだからさー！

そお、でもこれだけお元気ならっ♡
まだまだ大丈夫よお♡♡♡♡♡

ちゅぽっ♡♡♡♡♡

しゅぽっ♡♡♡♡♡

しゅぽっ♡♡♡♡♡

ちゅぽっ♡♡♡♡♡

ちゅぽっ♡♡♡♡♡

中ニ入ん♡♡



陽子ちゃんで助かったわー♡最近
すっかり弱ってたもんだからさー！

にそのまま出しちゃって♡私のお口
義男さん♡♡♡♡♡

しゃべり♡

しゃべり♡

しゃべり♡

中に入ん♡

しゃべり♡

しゃべり♡



陽子ちゃんで助かったわー♡最近
すっかり弱ってたもんだからさー！

(…・すっっっっっ♡♡♡♡♡)
いもぎゅくっくっ♡♡♡♡♡

ふんふん

どろどろ
どろどろ



ありがとね〜陽子ちゃん!♡♡
居間にお菓子用意してあるからお茶してきなよっ♡♡

だめ...♡コレ飲むとっ♡♡スイッチ
入っちゃう...♡!♡♡♡

えんや
うんや

だん
そい
えん

どど
どど
どど



「最後は……村長の家か……。」



「いやいや♡来るなりす♡いがりつぽよう
ですな♡陽子さん♡♡♡♡♡」

んっ！♡♡♡♡♡んっ！♡♡♡♡♡
んっ！♡♡♡♡♡んっ！♡♡♡♡♡
んっ！♡♡♡♡♡んっ！♡♡♡♡♡

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ

びしょ





「いやいや♡来るなりすこいがつぎよう
ですな♡陽子さん♡♡♡♡♡」

みん

ごめんっ!♡んっ!♡んっ!
ごめんなっひやいっ♡♡♡♡♡

「まったく...♡さんなにお〇んこ蒸らし
ながら練り歩いて...♡神事を務めてい
る自覚に欠けておりますな♡♡♡♡♡」

みん

みん

みん

みん

みん

みん



「神様にかしづく時には嘘偽りのない澄んだ
心持ちでなくてはなりませんぞ♡」

ごめんっ!♡ごめんっ!
ごめんなっ!♡ごめんなっ!
ごめんなっ!♡ごめんなっ!

「まったく...♡さんなにお〇んこ蒸らし
ながら練り歩いて...♡神事を務めてい
る自覚に欠けておりますなっ♡♡♡」



陽子さんの心の声を、正直に神様にお伝えなさいー♡♡♡

「.....」

んほー♡♡♡んほー♡♡♡

んほー♡♡♡んほー♡♡♡

んほー♡♡♡んほー♡♡♡

んほー♡♡♡んほー♡♡♡

んほー♡♡♡んほー♡♡♡

んほー♡♡♡んほー♡♡♡

んほー♡♡♡んほー♡♡♡

んほー♡♡♡んほー♡♡♡

んほー♡♡♡んほー♡♡♡

んほー♡♡♡んほー♡♡♡

んほー♡♡♡んほー♡♡♡

んほー♡♡♡んほー♡♡♡

んほー♡♡♡んほー♡♡♡

んほー♡♡♡んほー♡♡♡



陽子さんの心の声を、正直に神様にお伝えなさいー♡♡♡

んっあっー♡「めんなさー♡はい♡はい♡
わたしっ♡もっ♡もっ♡我慢できなくて

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

んっ

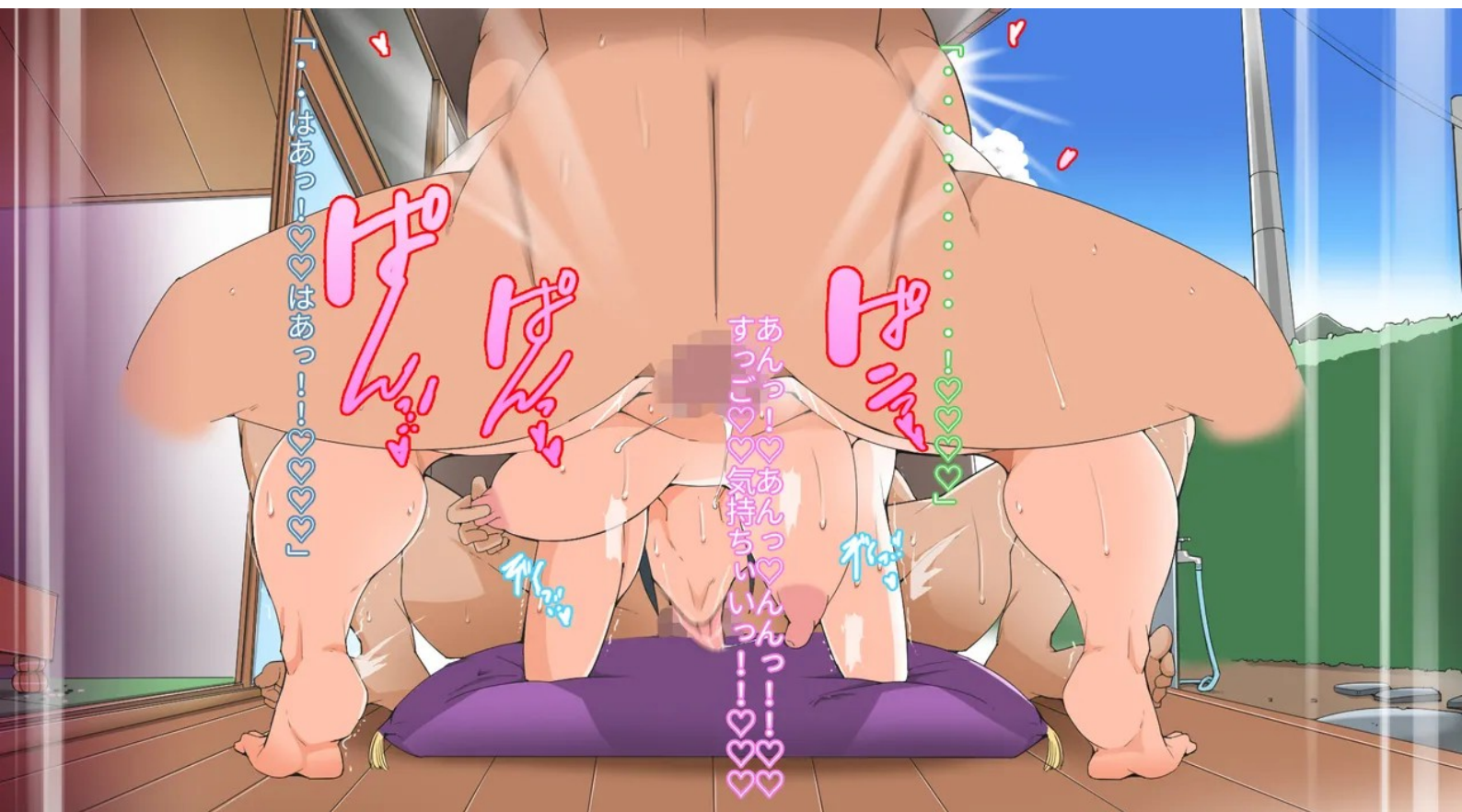
んっ

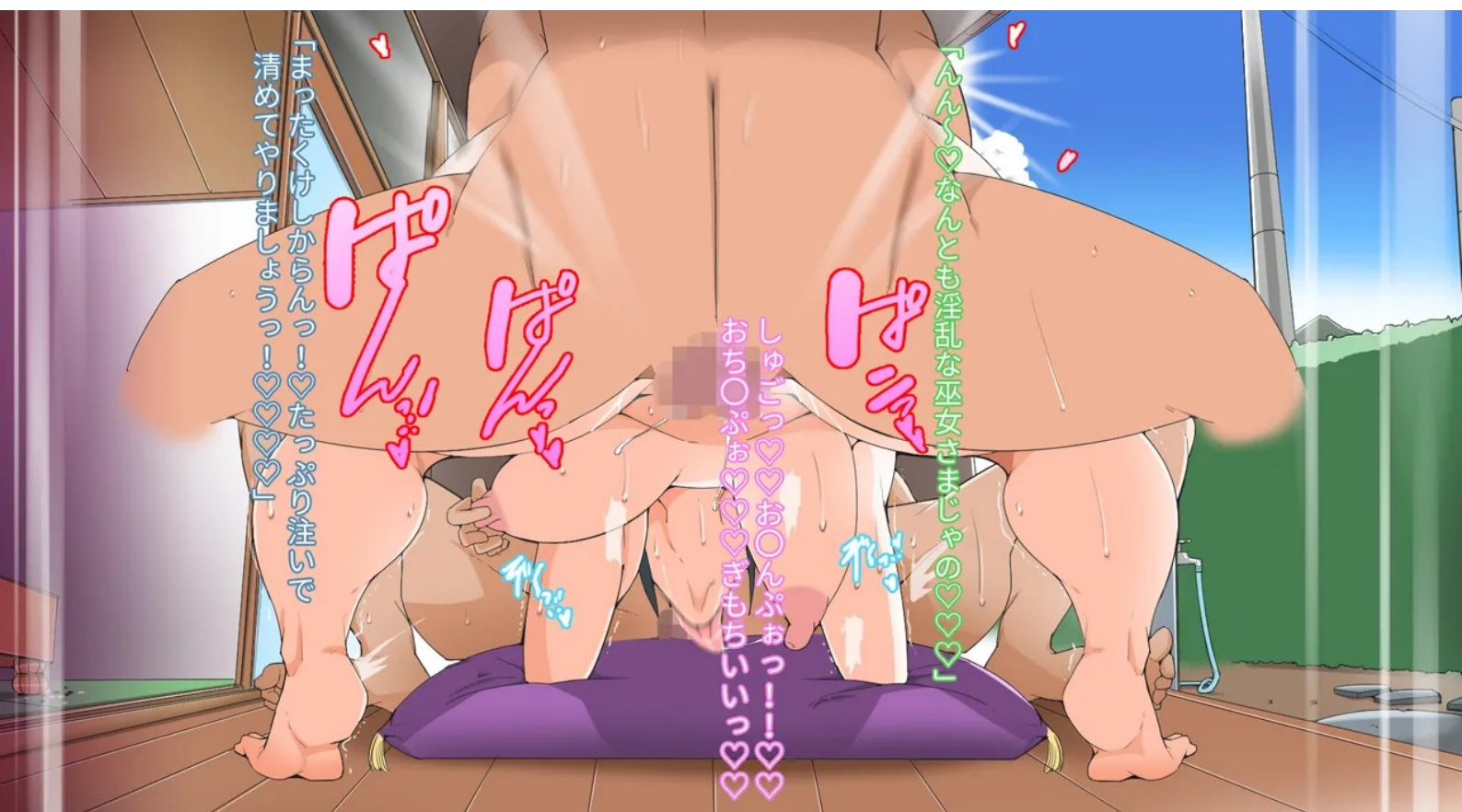












「まったくけしからんっ！♡たっぷり注いで
清めてやりまじょうっ！♡♡♡♡♡」

「んっ♡なんとも淫乱な巫女さまじゃの♡♡♡」

しゅじゅ♡♡♡お○んぷおっ---♡♡♡
おち○ぶお♡♡♡♡♡ぎもちっ♡♡♡♡♡

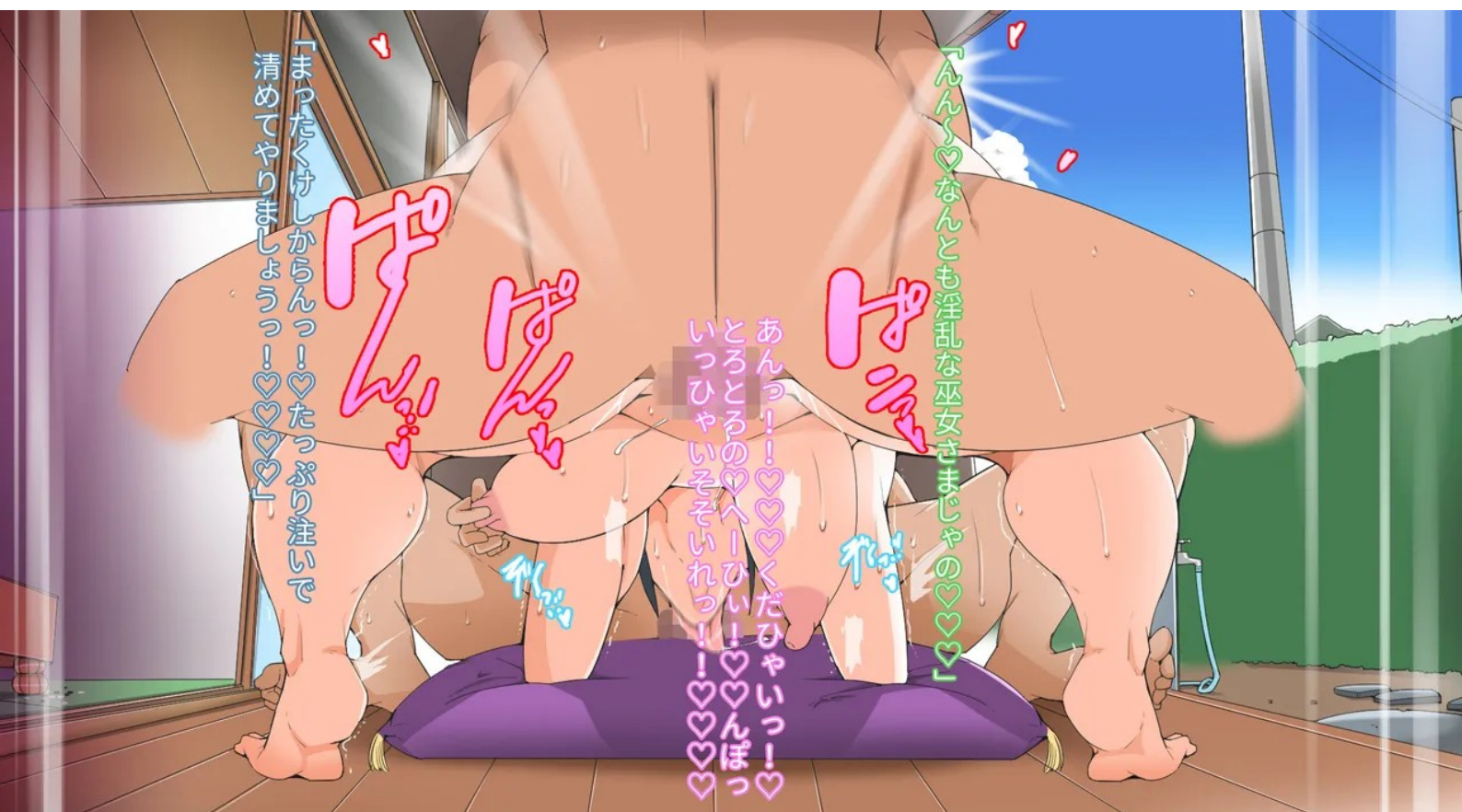
げん

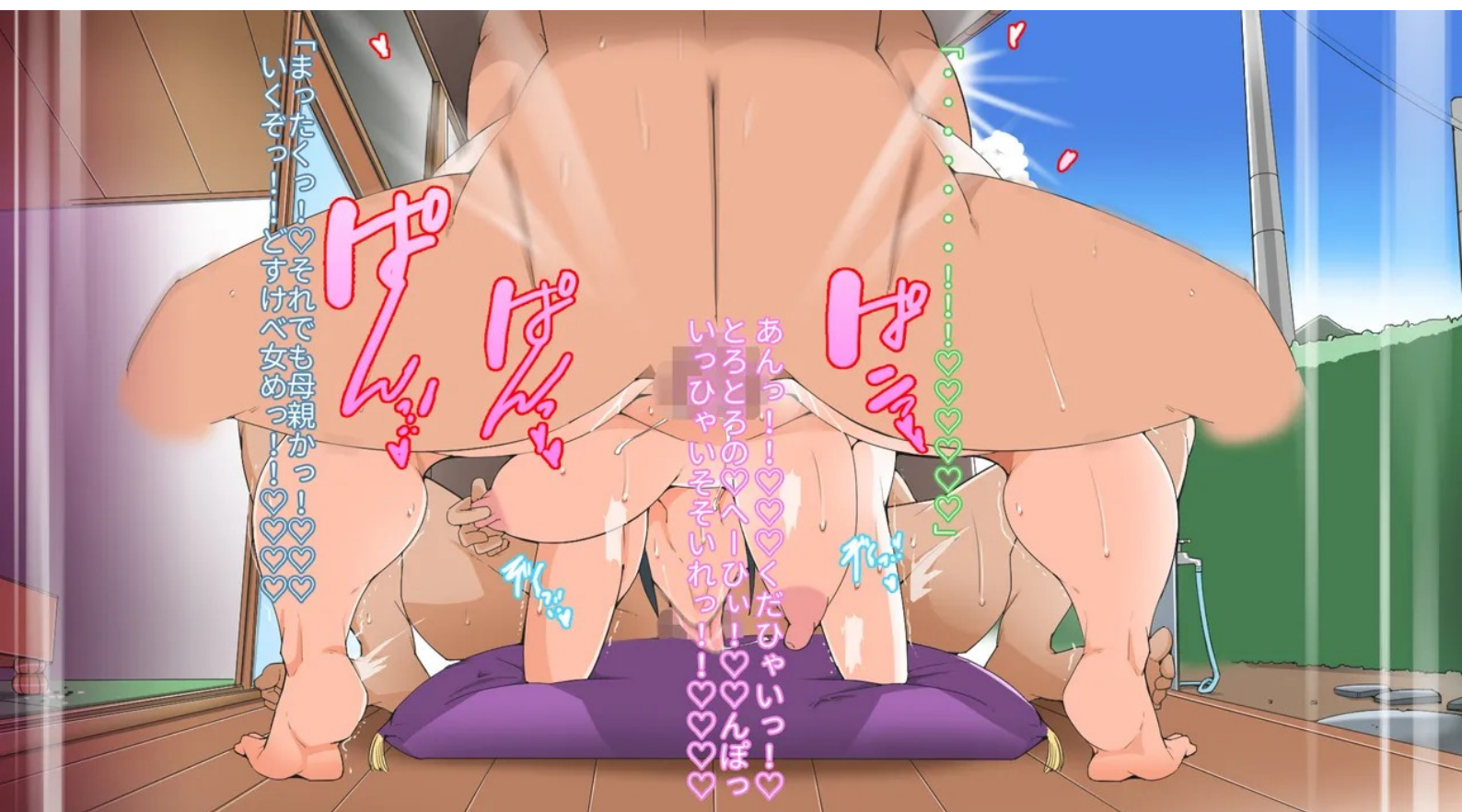
げん

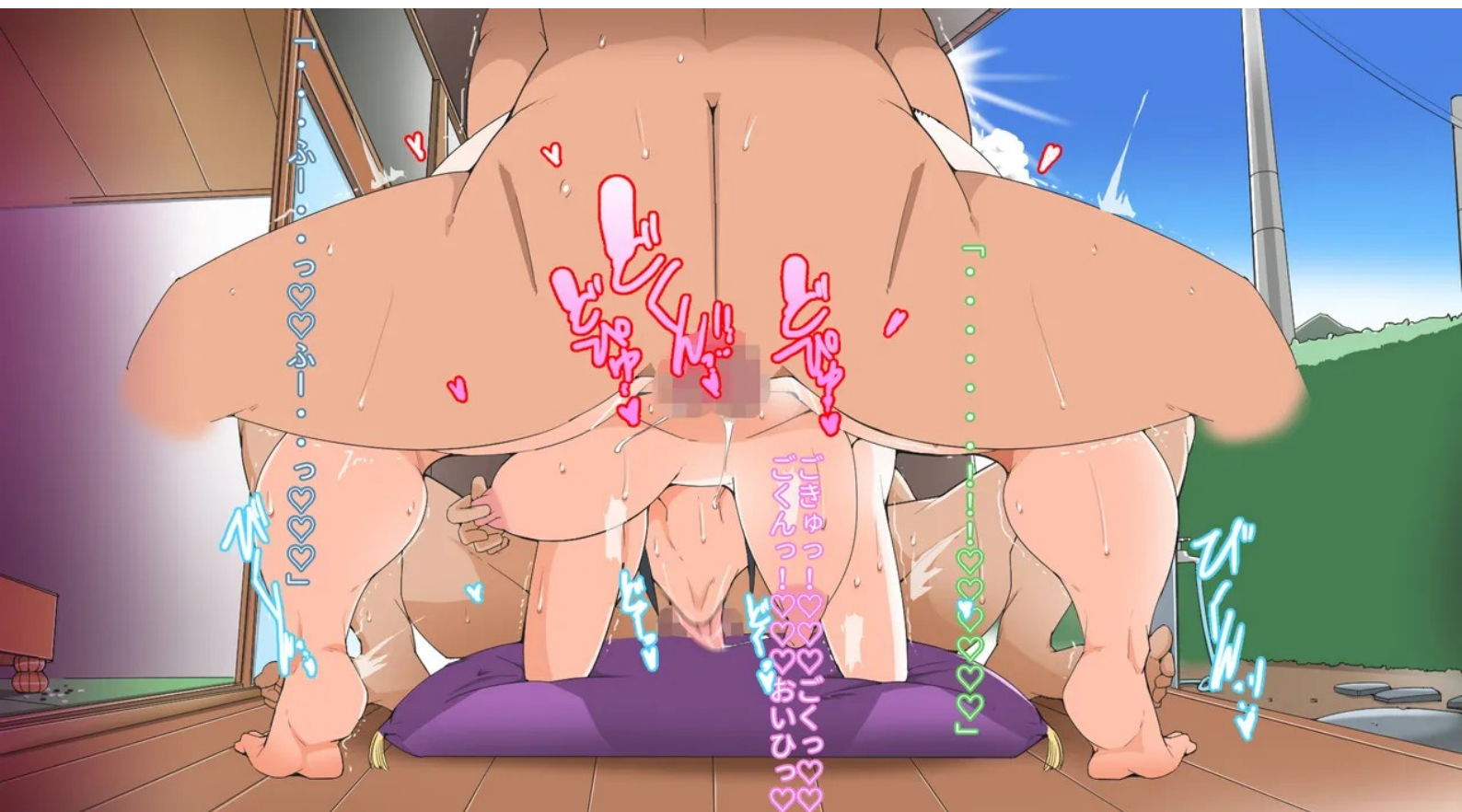
げん

ぐん

ぐん









その後、母は無事に務めを終えて、俺達兄弟もまた実家を後にした。まさに夢のようなひと夏だった。だが記憶というのは風化する。現実が起こったどんなに鮮烈な記憶でも、時が経てば夢とかわりがなくなるほど曖昧になってうすれてゆくもの。もしもその理りに抗い得る「記憶」があるのだとすれば。。。。。。それは、



はあっー♡はあっー♡♡はあっー♡♡♡

肉体に刻み込まれた記憶だけなのだ。。。！♡

ぽんぽん！♡

ぽんぽん！♡

はっー♡はっー♡♡はっー♡♡♡
あっー♡お、奥っー♡♡を待たっー♡♡♡

ぽんぽん！♡



すっぴん♡おっぱい♡お尻♡「濡れちゃった」
濡れちゃった♡♡♡♡♡

げんげん!!

げんげん!!
げんげん!!

はっ♡なん♡なん♡なん♡なん♡なん♡なん♡
ああっ♡お、奥♡奥♡奥♡奥♡奥♡奥♡

げんげん!!
げんげん!!
げんげん!!



すっぴん♡なすちゃん♡おしり♡編みじたまらなく
濡れまわって♡♡♡♡♡

ぽんぽん!!

ぽん!!
ぽん!!
ぽん!!

だっ♡♡めさ♡胸♡の♡な♡は♡♡
一番♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡

ぽん!!
ぽん!!
ぽん!!















お・し・ま・い